

長野県東筑摩郡四賀村

AKANUTA KOBİYASHIKI

赤怒田コビヤシキ遺跡

— 発掘調査報告書 —

1997.3

四賀村教育委員会

凡例・例言

- 1 本書は平成7年6月26日～10月12日に行われた東筑摩郡四賀村大字赤怒田64番地ほかに所在する赤怒田コピヤシキ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は四賀村による宅地造成事業に伴う緊急発掘調査で、長野県教育委員会の指導をうけ四賀村教育委員会が調査団を組織して実施した。
- 3 本調査の実施にあたり明科町教育委員会、豊科町教育委員会から支援をうけた。
- 4 本書の執筆と編集は、樋口昇一、久保田高弘、直井雅尚が行った。
- 5 本書の作成にあたり以下の図書、資料を参考にした。
四賀村教育委員会 1995『長野県東筑摩郡四賀村「コピヤシキ遺跡」現地説明会資料 平成7年9月3日』
四賀村誌編纂会 1978『四賀村誌』
財長野県埋蔵文化財センター 1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3－塩尻市内
その2－吉田川西遺跡』
財長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内
その1－総論編』
- 6 本文、図・表中で用いた遺構の略称は次のとおり。
竪穴住居址：SB、掘立柱建物址：ST、土坑：SK、ピット：P、暗渠：暗
- 7 土器類実測図の断面表現は次のとおり。
白抜き：縄文土器・土師器・黒色土器、黒塗り：須恵器・陶磁器、灰色：灰釉陶器
- 8 図中で用いた方位記号、座標軸は真北を指している。
- 9 発掘調査と本書作成にあたって次の方々からご教示、御協力をいただいた。記して感謝を申し上げる。
大澤 哲、桐原 健、島田哲男、竹内靖長、竹原 学、原 明芳、宮島義和、山田真一
- 10 本調査で出土した遺物および調査の記録類は四賀村教育委員会が保管、収蔵している。

目次

例言・目次

第I章 調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯 …………… 2 第2節 調査体制 …………… 2

第II章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境 …………… 3 第2節 歴史的環境 …………… 3

第III章 調査成果

- 第1節 調査の概要 …………… 5

第2節 発見された遺構

- 1 竪穴住居址 …………… 8 2 掘立柱建物址 …………… 10 3 土坑・ピット …………… 10
4 墓址 …………… 10 5 暗渠 …………… 11

第3節 出土遺物

- 1 土器・土製品 …………… 13
2 石器・石製品 …………… 23
3 金属製品 …………… 23

第IV章 総括 …………… 27

写真図版

報告書抄録

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯

四賀村は、過疎化が進み、人口も徐々に減少の傾向にあったため、村の活性化を図り活気を取り戻そうと、平成 5 年度ごろから宅地造成事業の計画が検討された。松本市に近い、交通の便がよい四賀村大字赤怒田 64 番地一帯が候補地となり、当地帯は大部分が荒廃農地であったため、有効利活用も図れるということで、村の事業として宅地造成を実施する方向となった。しかし、この場所は埋蔵文化財包蔵地「赤怒田遺跡」の隣接地となっていて、以前から遺物の発見もされていた。また、当地帯は平安時代の主要道路である官道（東山道）の「錦織駅」推定地のひとつとされており、その存在についても懸念された。平成 7 年度に長野県教育委員会文化財・生涯学習課と協議を行った結果、まず試掘調査をして、遺跡が確認できれば発掘調査をすることとなった。早速、試掘調査を実施したところ、縄文時代等の遺物や住居跡と思われるところが見つかったため、正式な発掘調査が必要となり、「赤怒田コビヤシキ遺跡」と名付け記録保存を行うこととなった。平成 7 年度に発掘調査費を補正予算に計上し、発掘調査を実施した。実施にあたって専門の発掘担当職員がいなかったため、樋口昇一氏に調査担当者をお願いし、周辺市町村からも調査員や発掘協力者の確保などについてご指導をいただき、平成 7 年度中に現場作業は終了した。その後も発掘された遺物の整理、報告書の刊行について各方面から助力をうけた。

なお、四賀村ではこのような大規模に発掘調査したのは初めてであったため、教育の観点からも必要ということで、中学生の見学会を行い、一般に向けては、文化財講座を開催し四賀の遺跡について勉強会を行った。

第 2 節 調査体制

調査団長 川窪宝蔵（四賀村教育長）

調査担当者 樋口昇一（日本考古学協会員）

協力者 清野 浩、小林明正、瀧澤正行、本林守志、丸山太郎、児玉学雄、斉藤正敏、
横内一郎、山本和弘（四賀村文化財調査員）

藤原誠子、唐沢政子、小林佐恵子、矢花広子、細尾みよ子、望月弘満（一般、明科町）

若林典子、本木ますみ、川窪鈴子、川窪夕美子、川窪宣子、川窪盈子、百瀬里江、倉科明子、
横内和子、小林孝子、保高京子、保高加奈子、横内怜子、伊沢 厚、矢満田登（一般、四賀村）

事務局 久保田高弘（四賀村教育委員会社会教育係）



第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

本遺跡がある会田盆地は、松本盆地の東方の山間に位置し、嶺間地方とも呼ばれるように周囲を標高1,000～1,600m前後の筑摩山地の山々に囲まれる独立した小盆地である。北は立峠や風越峠を介して筑北盆地と、南～西は会田川の河谷や刈谷原峠、稲倉峠を介して松本盆地と、そして東は保福寺峠や青木峠を介して上田盆地（小県）と結ばれている。

会田盆地をはじめとする四賀村一帯は糸魚川―静岡構造線東側のフォッサマグナ地域にあたり、広く新第三系中新統（約2,300万年前～500万年前）の別所層、青木層、小川層の堆積岩が分布する。これらは軟質の砂岩や砂質泥岩、黒色頁岩等の厚い堆積層で、クジラや貝類、魚類などの動物化石を豊富に含んでいる。会田盆地を開析した主河川は大洞山や御鷹山、入山等から水を集めて西流する会田川と、保福寺峠付近からの水を集めて西流した後に北流する保福寺川である。会田盆地はこれら主河川が前記の堆積岩層を浸食して形成されたもので、盆地を囲む低位山地も大半がこれらの層から形成されている。河川流域には砂・礫などの堆積物が厚い層をなし、その両側には数段の河岸段丘が形成されている。氾濫原に面した微高地や段丘上に集落が発達し、低地面を中心に水田が分布する。河川の両岸は盆地を囲む山々の崖錐性斜面であり、その末端が河川の浸食をうけ、段丘崖として氾濫原に接している。この崖錐性堆積物のうち、特に質の良い粘質土は古墳時代末から平安時代にかけて須恵器生産の原料土として利用され、反町から斎田原一帯を中心に分布する窯跡群は松本平に供給される須恵器生産の一翼を担った。また、会田地区は近年まで瓦の産地としても知られ、周辺には粘土採掘坑も残る。

第2節 歴史的環境

(1) 原始・古代

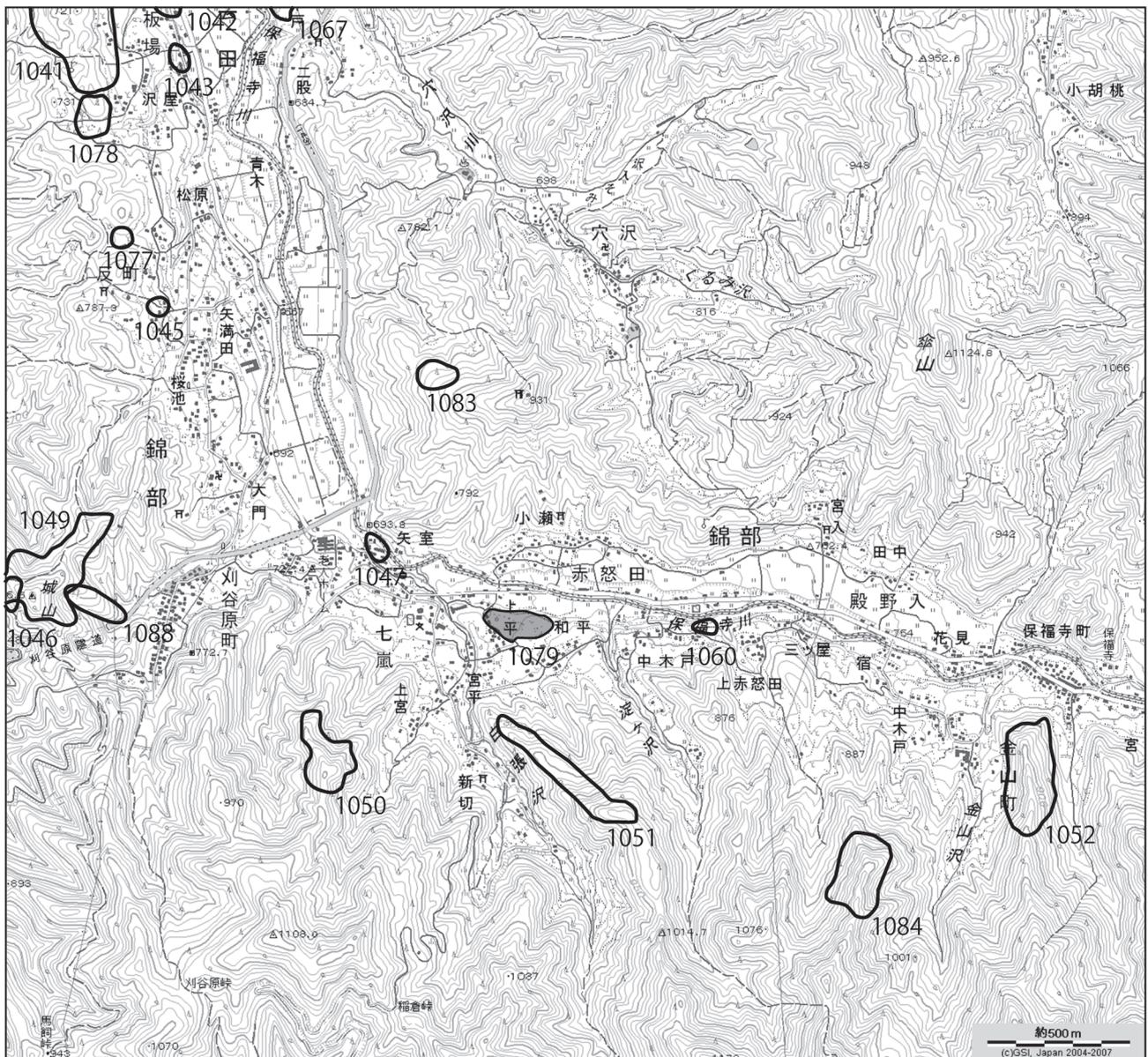
四賀村における原始・古代の状況は未解明の部分が多く、発掘調査もほとんど行われていない。『長野県史』所載の遺跡一覧表によると、四賀村内の縄文遺跡は34カ所が記載されている。そのほとんどは会田川や保福寺川の段丘上や支流が形成した河谷に所在する小規模な遺跡で、石鏃の単独採集地点が多く、集落遺跡とは言い難い状況である。そのような中で、昭和33年に調査された五常地区の井刈遺跡では、中・後期の集石・配石とともに土偶・土版や石棒等の祭祀遺物を含む土器・石器類が多量に出土した。続く弥生時代は遺跡が激減し2地点を数えるに過ぎない。保福寺川流域の赤怒田遺跡は昭和51年に発掘調査が行われ、後期の土器が出土している。この状況は古墳時代に至っても変わらず、現在のところ集落跡と呼べる遺跡は知られていない。ただし古墳時代後期末（7世紀）になると窯業生産という形で遺跡の展開が始まり、会田川流域と保福寺川流域に窯跡の分布が知られている。最も古い例は7世紀代に遡る斎田原窯跡で、発掘調査によるものではないが当該期の遺物が多数採集されている。8世紀には生産が本格化し9世紀まで続いたようである。保福寺川左岸の板場窯跡やムジナカワ窯跡等では発掘調査も行われているが、多くは表面採集による資料であり、窯跡群個々の実態は不明な部分も多い。広域的にみると8・9世紀を中心に、松本市北部の芥子坊主山から安曇野市東山、四賀村の会田盆地西部にかけての一角が松本平最大の窯業生産地となっている。この要因は第三紀層の風化に起因する良質な粘土と燃料のための森林資源が豊富に得られる地域的な特質であろう。そのため四賀村内でも奈良・平安時代の遺跡は増加に転じ、15遺跡を数えるまでに至る。

古代の文献からは令制東山道が村内を通過していたと推定されており、松本市岡田から稲倉峠を越えて錦部に至り、東進して保福寺峠を越え小県郡に至るルートが想定されている。錦織駅が置かれ、定額寺である錦織寺の名もみえるが、考古学的な解明はまったく進んでいない。東山道は錦織駅から分岐して越後に抜け

る支道があり、これは反町から板場を経て北へ直進し、会田を抜けて筑北境の古峠に至るルートが推定されているが、やはり考古学的な裏付けは未発見である。古代の会田盆地は須恵器生産や交通の要衝として非常に重要な位置にあったといえることができる。

(2) 中世

鎌倉時代から室町時代にかけて会田には伊勢神宮内宮の御厨がおかれ、建久4年(1193)、神宮の『神鳳鈔』に「内宮 会田御厨 七十町」の記述がある。中世にこの地を会田氏が治めたという伝承が残るが、現存する中世文書に会田姓を名乗る当主は登場しない。知ることでできる最初の史料は嘉暦4年(1329)の『鎌倉幕府下知状案』で、諏訪社上社の祭の頭役に「會田御厨海野信濃權守入道以下」の記載がある。海野氏は小県郡の滋野氏の系統をひくとされる一族で、14世紀前半には東信地方から海野氏が会田盆地に勢力を拡大していたことがわかる。続く史料は享徳4年(1455)の『諏訪御符禮之古書』で、「會田、岩下入道沙弥重阿」が登場し、15世紀後半には「岩下海野」「海野岩下」が会田の当主として記述される。天正9年(1581)の『信



- 1041 板場窯跡 1042 庚申堂遺跡 1043 沢屋遺跡 1045 反町遺跡 1046 鷹巣根城山西窯跡 1047 学校付近遺跡
 1049 鷹巣根城跡 1050 荒神尾城跡 1051 見場城跡 1052 掻揚城跡 1060 赤怒田遺跡 1067 砦跡 1077 猪皮窯跡
 1078 赤土市兵衛沢窯跡 1079 赤怒田コビヤシキ遺跡 1083 富士塚遺跡 1084 猿こや 1088 鷹巣根城山東窯跡

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

『濃国道者之御祓いくばり日記』には岩下を名乗る7名が会田の住人の筆頭に記載されている。海野氏から同族の岩下氏に変わり、岩下氏は天文22年(1553)に武田晴信に降り起請文を出している。武田氏の滅亡後、信濃を奪回した小笠原貞慶に対抗し、越後の上杉氏に内通するが、天正10年(1582)に小笠原氏に攻められ滅亡した。古代と同様に交通の要衝として争奪が続く地勢であったのだろう。

第三章 調査成果

第1節 調査の概要

1 調査地の設定

調査の原因事業は村営宅地造成事業で、遺跡にかかる範囲は約26,970㎡である。遺跡は西方へ流下する保福寺川の南側、左岸の河岸段丘上にあり、東側の淀ヶ沢、西側の白張沢が開析する浅谷に挟まれた、南東から北西にむかう緩斜面にある。事業地の一帯は調査前は畑地で、多くが荒廃農地となっていた。事業予定地内に西地区と東地区の2カ所の調査区を設定した(第3図)。標高は725.4～737.9m、平面座標はX=34670～34750、Y=-44070～-44290(日本測地、平面直角座標系第Ⅷ系)の範囲にあたる。

2 調査の方法

現場作業は遺構検出面まで重機掘削、その後は人力で検出と掘り下げを行った。遺構種別は略号(竪穴住居:SB、掘立柱建物:ST、土坑:SK、ピット:P)とし、遺構番号はSB(竪穴住居)は101、その他の遺構はそれぞれ1からの通番を付した。測量は調査地全体と個々の遺構を写真測量で行い、断面図や遺物出土状況図、細部図は1/20の実測図を作成した。遺物の取り上げは、図化・No付与と埋土一括等を状況に応じて使い分けた。写真撮影は一眼レフカメラで35mmフィルム(モノクロ、カラーネガ)を使用した。調査の終了段階で航空写真(カラーリバーサル)を撮影した。

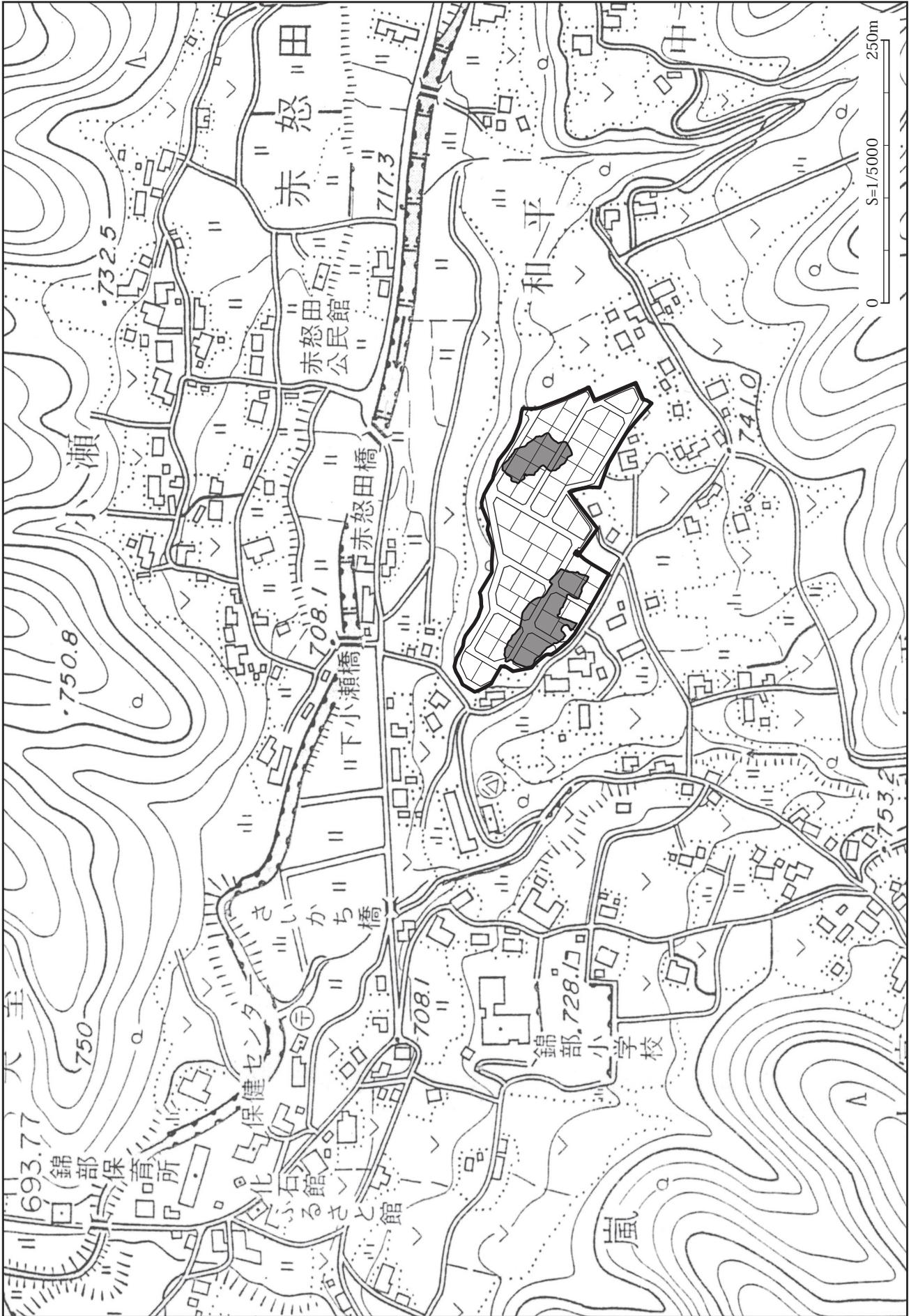
3 調査成果の概要

調査面積は4,830㎡(内訳は西地区3,174㎡、東地区1,656㎡)、発見された遺構は竪穴住居13棟(縄文3、平安8、不明2)、掘立柱建物5棟、土坑537基、暗渠3条である。遺物は縄文時代の土器と石器、古代(平安時代)の土器・陶器、鉄器、中世の土器、近世以降の陶磁器、金属製品がある。縄文時代と平安時代の小規模な集落跡、近世以降の屋敷跡と思われるものが捉えられた。

4 各地区の概要

西地区は河岸段丘の縁辺に沿って南東から北西に延びるが、地区の約半分の北西側は舌状に張り出す台地上に位置する。竪穴住居址10棟(縄文3、平安5、不明2)、掘立柱建物5棟(古代2、中世以降3、いずれも推定)、土坑・ピット412基(縄文～近代)、暗渠3条(近世～近代)が検出されているが、場所によっては削平が著しい。各時期の遺構は地区内全面に展開し、時期によってはいくつかのまとまりが読み取れる(Ⅲ章2節3土坑、5暗渠を参照)。平安時代に属す竪穴住居址の主軸方向は統一性がない。

東地区は西地区から約100m東方にあり、河岸段丘の端部に近い。竪穴住居址3棟(平安)、土坑・ピット125基(縄文～近代と推定)が検出された。竪穴住居址は地区の東側にあり、主軸方向をそろえてほぼ南北に並ぶように設けられていた。土坑・ピットは主に地区の中央部に広がる。西地区と同様に類似する規模、規格でいくつかのまとまりがあるようにみえたが、調査時には建物址などとして捉えることはできなかった。



第2図 赤怒田コピヤシキ遺跡調査地の位置



第3図 赤怒田コピヤシキ遺跡調査区配置図

第2節 発見された遺構

1 竪穴住居址 (SB101～113)

SB101

西地区北端部に位置する。土坑2基に切られる。北西側のほぼ半分が削平により失われているが、平面形は直径5～6mの円形を呈すと推定する。中央部北寄りの大礫を伴った窪みは炉と推定される。この炉から60cmほど南の床上には、直径45cmほどの窪みに大形の深鉢の大破片を敷き詰め、北側を礫で囲んだ施設があった。土器片はすべて内面を表にして敷かれており、周囲には被熱痕も確認された。炉の一種と考えたい。ピットは13基あるが柱穴の特定はできていない。

遺物は縄文土器1点(第6図5)を図示、他に石器4点がある。本址の時期は縄文中期後半に属する。

SB102

西地区北部に位置する。北北東-南南西方向を主軸とする方形基調の平面形を呈したと推定される。北東コーナー周辺が残存するだけなので規模の推定はできない。本址内に含まれると想定される範囲に大小14基のピットが存するが、いずれも本址に属するものか確定できない。炉・カマドに相当するものは確認できなかった。

遺物は縄文土器1点(第6図6)と古代の土器6点(第7図10～15)を図示できた。縄文土器は混入品であろう。本址の時期は平安時代前期である。

SB103

西地区中央部北寄りに位置する。縄文時代の竪穴住居の可能性を考えて設定したが、最終的に直径1.5mほどの土坑となった。縄文時代の石鏃1点(第11図6)と古代の土器1点(第7図16:土師器甕)を図示できたが、この土器をもって本址の時期と考えたい。

SB104

西地区中央部北寄りに位置する。土坑4基に切られる。平面形は北東-南西方向を主軸とする不整な長方形を呈し、特に北コーナーは大きくずれている。規模は長軸5.2m、短軸4.5mを測る。14基のピットがあるが柱穴の特定はできない。カマドは北東壁の中央部やや北寄りに設けられ、袖に埋め込んだとみられる礫が3点残存していた。

遺物は古代の土器6点(第7図17～22)を図示できた。本址の時期は平安時代前期である。

SB105

西地区中央部北寄りに位置する。土坑2基に切られる。平面形は西北西-東南東方向を主軸とする方形か長方形と推定するが、西半分は失われており、南壁の異様な歪みも本来の姿ではないであろう。規模は東壁の長さが4.3mを測る。明らかに本址を切っているもの以外に5基のピットを認めるが、柱穴の特定はできない。カマドは東壁の中央部に設けられていたと推定され、壁外にやや突出し、火床には被熱層が形成されていた。

遺物は古代の土器5点(第7図23～26)を図示できた。本址の時期は平安時代前期である。

SB106

西地区中央部南寄りに位置する。縄文時代の住居址の可能性を考えて設定し、最終的に一辺1.4mほどの隅丸方形の土坑と、その周囲の数基のピットになった。壁はまったく把握できなかった。土坑から南西へ60cmほど離れた位置には大形の深鉢の胴部下半が正位で埋設されていた。

遺物は1点(第6図8)を図示できた。埋設されていた縄文土器である。本址の時期は縄文時代中期後半と推定する。

SB107

西地区中央部南西隅に位置する。土坑 3 基に切られる。平面形は北東—南西方向を主軸とする長方形、東隅コーナーはやや張り出す。規模は長軸 3.0m、短軸 2.6m を測る。ピットは本址に伴うものかわからない。炉、カマドは確認できなかつた。図示できた遺物はない。本址の時期は不明である。

SB108

西地区中央部の南端付近に位置し、一部が調査区域外にかかる。3 基の土坑に切られているが、いずれも本址の床面までは達していない。平面形は短径 2.6m、長径 3m ほどの楕円形を呈すと推定する。中央に土器を埋設した窪みがあり、炉とみられる。ピットは 4 基あり、柱穴の特定はできていない。

図示できた土器はない。埋設土器は非常に脆くなっており図化提示できなかつた。石器は 4 点あり、うち 2 点（第 11 図 1・2）を図示した。本址の時期は縄文時代中期中葉と推定する。

SB109

西地区南東端に位置し、SB110 と重複する。平面形は東北東—西南西方向を主軸とする方形か長方形と推定するが、西半分は失われている。規模は完存する東壁で 6.8m を測る。本址範囲内には多数の土坑・ピットがあるが、周辺にも土坑・ピットが多く分布するため、本址に属するものを特定できなかつた。カマドは東壁中央部のやや南寄りに複数の石が袖状に並んでいる部分で、火床はやや被熱していた。

遺物は古代の土器 16 点（第 7・8 図 28～43）を図示できた。これらからみると本址の時期は平安時代前期である。重複する SB110 との前後関係は、出土土器からみると本址が新しい。

SB110

西地区南東端に位置し、SB109 と重複する。また近世～近代にかけてのものと考えられる溝や土坑などに切られる。平面形は南東—北西方向を主軸とする方形か長方形と推定するが、北西部の半分は失われている。規模は完存する南東壁で 5.0m を測る。炉、カマドは確認できなかつた。

遺物は古代の土器 17 点（第 8 図 44～60）を提示できた。これらからみると本址の時期は平安時代前期である。重複する SB109 との前後関係は、出土土器からみると本址が古い。

SB111

東地区南東部に位置する。平面形は南北方向を主軸とする一辺 4.5m ほどのやや不整な隅丸方形を呈す。壁高は 20cm を測る。カマドが北壁の中央に設けられている。構築材として使われた礫が 6 点残っていた。ピットは 3 基確認されたが、配置からみて柱穴であった可能性は低いと思われる。

遺物は古代の土器が 9 点（第 9 図 61～69）図示できた。本址の時期は平安時代前期である。本址および隣の SB112 からは多数の石器が出土しているが、周辺の縄文遺構に由来する混入品とみられる。

SB112

東地区南東部に位置する。平面形は南北方向を主軸とする方形を呈し、一辺は 5.7m とかなり大型である。壁高は 20cm を測る。カマドは北壁の中央に設けられていたらしく、片側の袖石と焼土面が残る。ピットは 8 基確認されたが、柱穴に相当するか判断できなかつた。

遺物は古代の土器 17 点（第 9 図 70～86）が図示できた。本址の時期は平安時代前期である。

SB113

東地区東部に位置する。平面形は南北方向を主軸とする一辺 4.5m 前後の不整な方形を呈す。北壁のすべてと東壁の大半は失われている。壁高は最も残りの良い南壁で 10cm を測る。炉、カマドは確認できない。おそらく北壁か東壁にカマドが設けられていたのであろう。ピットは 5 基確認されたが、柱穴に相当するか判断できなかつた。

遺物は古代の土器 6 点（第 9・10 図 87～92）が図示できた。本址の時期は平安時代前期である。

2 掘立柱建物址 (ST1 ～ 5)

ST1

西地区北端部に位置する。N20° E に長軸方向を採る 2 間× 1 間の側柱式で、桁行 3.0m、梁行 1.5m を測る。柱穴の規模、配列は不揃いである。時期を特定できる遺物はないが、位置や形状から中世～近世に属するものと推定する。

ST2

西地区北部に位置する。N72° W に長軸方向を採る 3 間× 2 間の側柱式で、桁行 5.1m、梁行 3.75m を測る。柱穴の直径 40 ～ 55cm で、柱間は桁行 1.5 ～ 1.6m、梁行 1.7 ～ 1.8m、配列は整然としている。時期を特定できる遺物はないが、規模や形状から古代に属する可能性がある。

ST3

西地区中央部に位置する。N45° W に長軸方向を採る 3 間× 2 間の側柱式で、桁行 6.75m、梁行 3.6 ～ 3.75m を測る。柱穴の直径 40 ～ 75cm と差が大きく、柱間は桁行 1.9 ～ 2.4m、梁行 1.65 ～ 1.95m で、配列に偏りがある。本址と ST4 は隣接し、軸方向が類似している。時期を特定できる遺物はないが、規模や形状から中世～近世に属すると推定する。

ST4

西地区中央部に位置する。N40° E に長軸方向を採る 2 間× 1 間の側柱式で、桁行 5.25m、梁行 3.75m を測る。柱穴の規模、配列は不揃いである。本址と ST3 は隣接し、軸方向が類似している。時期を特定できる遺物はないが、位置や形状から中世～近世に属するものと推定する。

ST5

西地区南部に位置する。N25° W に長軸方向を採る 2 間× 2 間の側柱式で、桁行 3.15m、梁行 3.0m を測る。柱穴の直径は 50cm 前後で揃っており、柱間は桁行 1.5 ～ 1.6m、梁行 1.7 ～ 1.8m、配列は整然としている。時期を特定できる遺物はないが、規模や形状から古代に属する可能性がある。

3 土坑 (SK)・ピット (P)

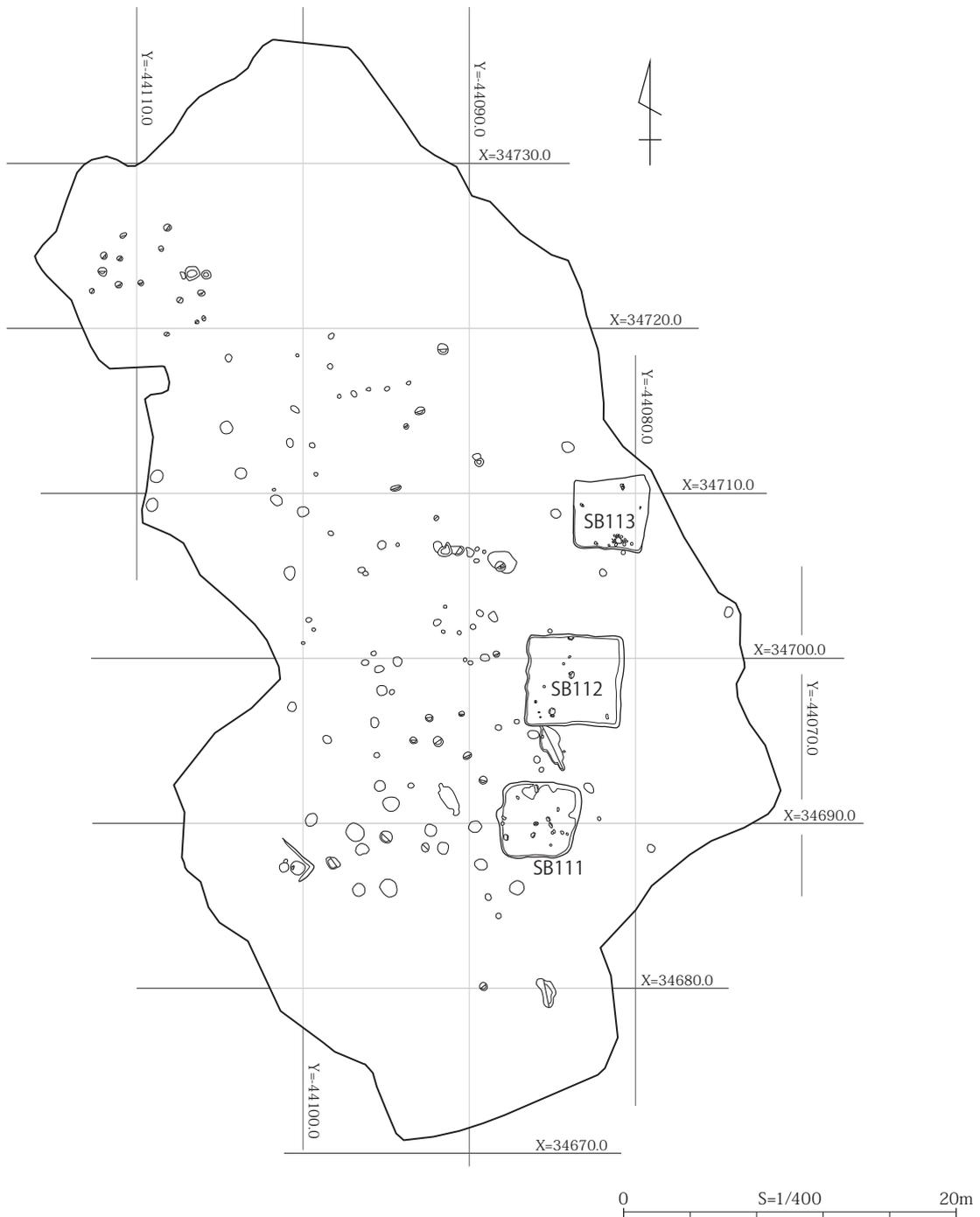
西地区で 412 基、東地区で 125 基、合計 537 基が確認された。平面形はおおむね円形基調、方形・隅丸方形、長方形・隅丸長方形、不整形の 4 種類に分けられる。大きさは円形基調のものが直径 20 ～ 150cm、方形・隅丸方形のものが一辺 120 ～ 240cm、長方形・隅丸長方形のものが長軸 120 ～ 260cm、不整形のものが長軸 60 ～ 300cm の範囲にほぼまとまっている。時期はほとんどのものが不明だが、円形基調の比較的小さなもののいくつかから縄文土器がまとまって出土している。方形・隅丸方形、長方形・隅丸長方形、不定形のもの是一定の範囲にまとまる傾向があり、そのエリアにある建物址などと一体の遺構群を形成 (ST1 周辺、ST3・4 周辺、SB107 周辺)、円形基調の多数の小土坑と一体の遺構群を形成 (SB109 西側・東側一帯)、暗渠に沿って配列 (西地区南西部) などの展開の仕方を見せている。中世～近世の建物、屋敷地などの痕跡の可能性も考慮に入れる必要があろう。

4 墓址

西地区北端部西隅の標高 725.5 ～ 725.7m の一帯は、東から続く傾斜地が段を付けて削られ平坦地として造成されている。この平坦面に展開する円形基調の土坑のいくつかからは人骨小片、歯などが検出されており、近代まで下る時期の墓地、墓域だったことが考えられる。

5 暗渠

西地区中央部と同南西部中央寄りの2カ所で、幅50cmほどの溝に割石を詰めたり並べたりした遺構が検出された。前者は南西から北東に向かって16m続き、直角に折れて北西へ12m続いている。後者は南西から北東へ12.6m伸び、その北東端より3mほど手前から南東に向かって16.5m、さらに直角に折れて南西へ7m続いている。両者の軸方位はおおむね一致している。俯瞰してみると前者は「L字形」、後者は「コの字形」を呈しており、それに囲まれた範囲に、土坑の項で触れた建物址と土坑群が一体になったものや配列するような土坑群が存在する。これらの石を詰めた溝状の遺構は、おそらく暗渠で、中世～近世の建物や屋敷、屋敷地を囲うように掘削、敷設されたものと考えられる。



第4図 東地区遺構配置図



第5図 西地区遺構配置図

第3節 出土遺物

1 土器・土製品（第1表）

縄文土器と土師器、須恵器、灰釉陶器、土師質土器、陶磁器がある。縄文土器は縄文時代中期、土師器・須恵器・灰釉陶器は古代（平安時代）、土師質土器は中世、陶磁器は近世以降のものであろう。112点を実測図で示した。

(1) 縄文土器（第6図1～9）

SB101・102・106、SK23・28・37・38・111から出土した。実測図9点を提示できた。1～4が中期初頭、6が中期中葉、5・7・8が中期後半のものである。9は浅い鉢形を呈す珍しい形態で、中期後半に属すると思われる。

(2) 古代の土器・土製品（第7～10図10～102）

今回の調査で出土した土器類の主体となる。93点を図化提示できた。種別、器種の分類と名称、単体や土器群としての時期や年代観は文献3に従う。種別は土師器、黒色土器A、須恵器、軟質須恵器と灰釉陶器があり、器種を種別ごとにみると、土師器が甕B、甕C、その他の甕、小型甕、黒色土器Aが杯A、椀、鉢、須恵器が杯A、杯B、蓋B、壺蓋、長頸壺、短頸壺、甕、軟質須恵器は杯Aのみ、灰釉陶器が椀、皿、長頸壺である。

主要な器種の特徴としては、杯Aは黒色土器Aと須恵器、軟質須恵器で構成され、土師器はみられない。ほとんどの底面に回転糸切り痕を残すが、黒色土器Aと須恵器に1点ずつヘラケズリがみられる（第7図17：須恵器、第9図90：黒色土器A）。杯Bは須恵器のみで点数は少ない。底部が残存するもののすべてに回転糸切り痕が認められる。須恵器の杯Aと杯Bには酸化炎焼成で橙色系の色調を呈すものが少なからずあるが堅緻な焼き上がりとなっている。椀と皿は黒色土器Aと灰釉陶器に限られており、点数は少ない。灰釉陶器の施釉は、内面のみの全面施釉（第7図27）と内外面ハケ塗り（第7図21、第9図66）である。土師器の甕は胴部外面に縦のハケメで器面調整される甕Bが主体となる。全形がわかるものはないが、ハケメが下端部まで及ぶもの（第7図16、第8図59）と底部際はケズリやナデでハケメが消されているもの（第8図40・41）がある。口頸部を形成するヨコナデ（ロクロナデ）が胴上部に及ぶもの（第7図14）もみられる。

出土地点（主にSB：竪穴住居址）ごとの器種構成、組み合わせの具体的な様相は後述①～⑩のとおりだが、全体的には須恵器と黒色土器Aの杯Aによる構成を中心とし、これに須恵器の杯Bや黒色土器A・灰釉陶器の皿・椀、煮炊き具の土師器の甕類が加わる状況になっている。器種構成の中で須恵器の杯Aが占める比率の大小、黒色土器Aや灰釉陶器の椀・皿の有無、土師器甕Bの器面調整などの要素に、各出土地点ごとの土器群に若干の違いが認められ、それは時期差に起因するものと考えられる。

① SB102 出土品（第7図10～15）

6点を図示。内訳は黒色土器Aの椀1点（10）、土師器甕Bが2点（14・15）、その他の甕が1点（13）、小型甕Dが2点（11・12）である。14の甕Bは胴部のハケメの上に最大径の付近までロクロ調整痕が残る。13の甕は口縁端部が面取り状に肥厚し、胴部はロクロ調整の後に外面は板状工具によるカキメ状の調整、内面は横方向の長いナデが行われる、あまり類例を見ないものである。全体として7期前後の様相を示すと考えられる。

② SB103 出土品（第7図16）

出土量は少なく、1点を図示できたのみである。土師器の甕Bの下半部で、外面のハケメは下端までしっかりと及んでおり、内面には典型的な長い縦のナデが行われている。6～7期のものであろう。

③ SB104 出土品 (第7図 17～22)

6点を図示できた。内訳は須恵器の杯Aが3点(17～19)、黒色土器Aの杯Aが1点(20)、灰釉陶器の皿1点(21)、土師器の小型甕Dが1点(22)である。須恵器の杯Aの17の底面は手持ちヘラケズリが行われている。18は色調が全体的に橙灰色を呈し、焼成が甘くきわめて脆いが外形やシャープな調整痕から須恵器と判断した。灰釉陶器の皿(21)は口径が14cmを超える大きなもので、施釉は刷毛塗りで内面見込み部にも刷毛でひと塗りされた施釉がある。底面以外に回転ヘラケズリが行われておらず、見た目より器肉が厚い。総体としての時期は、須恵器杯Aと灰釉陶器の皿が相伴しており、7期に置くことができると考える。

④ SB105 出土品 (第7図 23～27)

5点を図示できた。内訳は須恵器の杯Aが2点(23・24)、黒色土器Aの杯Aが2点(25・26)、灰釉陶器の椀が1点(27)である。23は内面の体部と底部の境界に稜がなく、焼成も甘くわずかに黒斑があるので軟質須恵器に近いが、内面にシャープなロクロ調整痕が残るので須恵器に分類した。体部外面には墨書がある。27の灰釉陶器椀は内面のみの全面施釉で、小さく角張る高台や強く腰の張った外形から黒笹14号窯式に属するものと推定する。総体として7期の土器群と考える。

⑤ SB109 出土品 (第7・8図 28～43)

出土量が多く16点を図示できた。内訳は須恵器の杯Aが3点(28～30)、杯B1点(31)、壺1点(43)、黒色土器Aの杯Aが3点(32～34)、椀が1点(35)、土師器は甕Bが2点(40・41)、その他の甕が1点(39)、小型甕Cが1点(42)、小型甕Dが3点(36～38)である。土師器の甕Bは典型的な縦のハケメ調整が行われる胴部外面の下端に広い範囲でケズリ(41)やケズリ状の工具ナデ(40)が行われている。その他の甕とした39は小型甕と同様のカキメが胴部外面に行われるが、下端には甕Bの41のようなケズリがあり、底面は回転糸切ではなく押圧による平坦化である。このため小型甕に分類しなかった。小型甕Cの42は台付甕である。小型甕Dのうち36は胴部外面、口縁内面にカキメが全くみられずロクロナデのみで調整されている。43の須恵器壺は高台が剥離しており、おそらく長頸壺であろう。総体としての時期は、須恵器杯Bがわずかに残るが黒色土器の椀が伴っており、7期に置くことができると考える。

⑥ SB110 出土品 (第8図 44～60)

出土量が多く17点を図示できた。内訳は須恵器の杯Aが12点(44～55)、壺が1点(60)、黒色土器Aの杯Aが1点(56)、土師器は甕Bが1点(59)、小型甕Dが2点(57・58)である。須恵器の杯Aの中には、焼成は堅緻だが器面の広い範囲が橙灰色や赤灰色を呈すものが目立つ(46・47・49～51・53・55)。土師器の甕B(59)は胴部外面の下端まできっちりと縦のハケメ調整が行われ、内面には特徴的な縦長のナデが観察される。総体としての時期は、土師器甕Bの調整痕のあり方や、須恵器杯Aが主体を占めることなどから6期から7期の古いころに置くことができると考える。

⑦ SB111 出土品 (第9図 61～69)

9点を図示できた。内訳は黒色土器Aの杯Aが3点(62～64)、椀(65)と皿B(67)、鉢(68)が各1点、軟質須恵器の杯Aが1点(61)、灰釉陶器の椀が1点(66)、土師器の小形甕Dが1点(69)である。黒色土器Aの鉢(68)は深めの椀型を呈する、この時期ではあまり見ない外形で、体部外面の下端には使用後に粘土を塗り付けて再度加熱したような痕跡が残る。灰釉陶器の椀(66)は口縁と体部上半を欠くが、底面とその外周に広く回転ヘラケズリが行われ、施釉は内外面に刷毛塗りで、見込み部にも刷毛でひと塗りされている。総体的な時期は黒色土器Aの杯Aが主体になり、同皿・椀と灰釉陶器の椀が伴うことから7期にあたりと考える。

⑧ SB112 出土品 (第9 図 70～86)

出土量が多く 17 点を図示できた。内訳は須恵器の杯 A が 10 点 (75～84)、杯 B が 3 点 (72～74)、蓋 B が 1 点 (70)、壺蓋が 1 点 (71)、短頸壺が 1 点 (86)、黒色土器 A の杯 A が 1 点 (85) である。須恵器の杯類のうち 73・74・76・77・79・81・82 は酸化炎焼成で器面は橙色系を呈している。杯 B の 73・74 の底面中央部には回転糸切痕が残る。須恵器の壺蓋 (71) は短頸壺の蓋と推定するが、86 の短頸壺とは口径に大きな差があり、これに伴うものとは思えない。86 の底面は回転糸切である。76・77 の須恵器杯 A の底面には墨書がある。薄れて判読が難しいが、いずれも 2～3 字の同じ墨書にみえる (写真図版 20 参照)。総体としての時期は、須恵器杯 A が主体を占め、同杯 B・蓋 B が伴っていることから 6 期にあたりと考える。

⑨ SB113 出土品 (第9・10 図 87～92)

6 点を図示できた。内訳は須恵器の杯 A が 2 点 (87・88)、黒色土器 A の杯 A が 2 点 (89・90)、土師器の甕 C が 1 点 (92)、その他の甕が 1 点 (91) である。須恵器杯 A の 87 は酸化炎焼成で器面の大半が橙灰色を呈す。88 は色調が褐色を呈し、胎土も土師器に近いが、内面の底部と体部の境界をしっかりと作っている外形から須恵器とした。黒色土器 A の杯 A の 89 は内面のミガキが細かく丁寧で、体部外面にもわずかにミガキが行われている。90 の底面は全面的に回転ヘラケズリが行われ、大きめの底径に古さを感じる。土師器のその他の甕とした 91 は大きく張る胴部から「く」の字に屈曲して開く口縁部を持ち、口縁端部にはわずかな面を作っている。器面調整に回転 (ロクロナデ) を用いた痕跡がなく、工具ナデとハケメが用いられている。外形、調整ともにあまり類例を見ないものである。土師器の甕 C (92) は頸部の屈曲が若干古い様相を示している。総体としての時期は、土師器の甕 C や黒色土器 A の杯の様相から 6 期の古い位置にあたりと考えたい。

⑩ SK33 出土品 (第10 図 93～101)

9 点を図示できた。須恵器の杯 A が 3 点 (93～95)、黒色土器 A の杯 A が 1 点 (96)、椀が 1 点 (98)、杯・椀の判別不能 1 点 (97: 深めなので椀の可能性が高い)、鉢 1 点 (99)、灰釉陶器の長頸壺 1 点 (100)、須恵器の長頸壺 1 点 (101) である。須恵器の杯 A のうち 94・95 は橙灰色から灰白色を呈し、甘い焼成で脆い。101 の須恵器は内面の色調と内面底部中央にまとまる自然釉の付着状況から長頸壺と判断した。底面はロクロからの切り離し痕がなく、押圧により平坦化された範囲にのみ、意図的かどうか不明だが釉がかかっている。初期的な灰釉陶器の可能性もある。須恵器杯 A と黒色土器 A の杯 A と椀が共伴しており 7 期に位置付けることができる。

(3) 中世の土器

2 点のカワラケ (第10 図 103・104) を図示できた。いずれもロクロが用いられており、口径が 7.5cm、8.1cm と小ぶりである。室町時代の所産と考えられる。

(4) 近世以降の陶磁器

磁器碗 2 点 (第10 図 105・106)、陶器碗 1 点 (同 107)、土器の甕 1 点 (同 108)、陶器の大形甕 1 点 (同 109)、陶器の播鉢 1 点 (同 110) と瓦質陶器 2 点 (同 111・112) を図示できた。瓦質陶器は 111 が炬燵か焔炉の一部、112 が火鉢であろう。112 の平面形は胴部が八角形、高台は円形を呈す。すべて近世とそれ以降の遺物と考えられる。

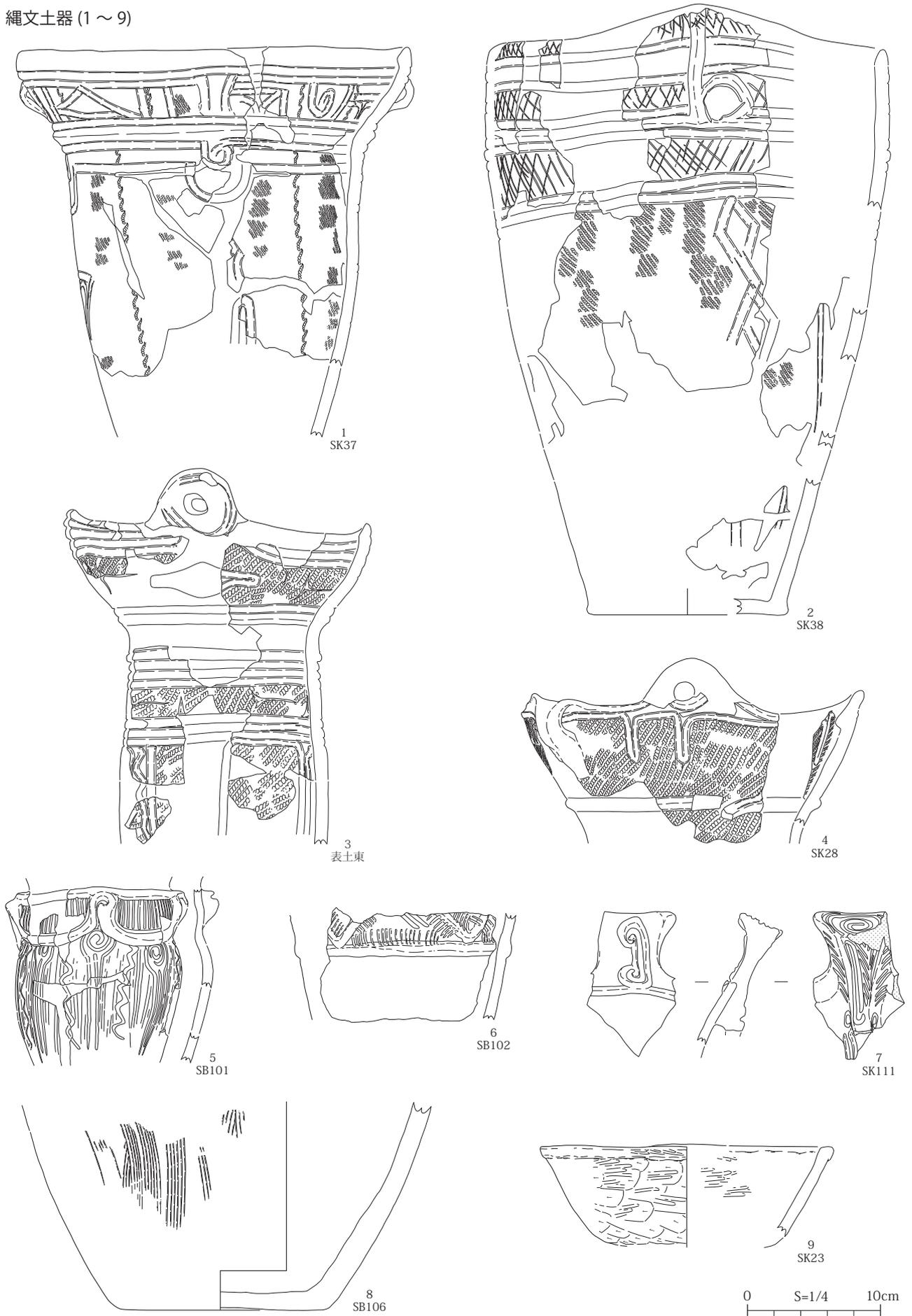
No	地点	種別	器種 器形	寸法			残存		成形・調整など	その他・備考	
				口径	底径	器高	口縁	底部			
1	SK37	縄	深鉢				?	欠	半截竹管による半隆起平行沈線文、把手4単位、結節縄文		
2	SK38	縄	深鉢	29.4	15.2	46.0	1/10	2/5	半截竹管による平行沈線文・隆帯、斜格子文		
3	表土東	縄	深鉢	23.0			1/4	?	平行沈線による半隆起線、三叉文、三角形陰刻		
4	SK28	縄	深鉢	25.0			1/3	欠	半截竹管による半隆起平行沈線文、把手6単位か、縄文単節LR縄文		
5	SB101	縄	深鉢					欠	4単位の隆帯区画内縦条線		
6	SB102	縄	深鉢					欠	隆帯の上に押し引き文、上部に太沈線	胴部1/4残	
7	SK111	縄	深鉢 (把手)					欠	唐草文	把手、大～中粒の大量の雲母、破片実測	
8	SB106	縄	深鉢		14.9			欠	完	櫛歯状施文具による縦条線	内外面摩滅、混入物極多
9	SK23	縄	鉢?	21.8			3/4	欠	外面横～斜めのケズリ、口唇部折り返し横ミガキ	内外面摩滅	
10	SB102	黒	碗	14.4	6.3	5.2	1/8	5/6	ミガキ、ロクロナデ、回転糸切り、ツケ高台	内外面摩滅	
11	SB102	土	小型甕	12.6			2/3	欠	口縁内側・胴部カキメ		
12	SB102	土	小型甕		7.4			欠	1/2	カキメ、回転糸切り	
13	SB102	土	甕	16.9				1/3	欠	ロクロナデ、ヨコナデ	
14	SB102	土	甕B	21.1				2/3	欠	ハケメのちロクロナデ、ヨコナデ、カキメ	
15	SB102	土	甕B	20.0				1/3	欠	ハケメ、ヨコナデ、カキメ、指おさえ	
16	SB103	土	甕B		8.1			欠	1/4	ハケメ、底面押圧平坦化	
17	SB104	須	杯A	13.5	6.5	4.0	2/5	2/3	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ	重ね焼き痕	
18	SB104	須	杯A	13.3	5.6	4.4	1/2	完	ロクロナデ、回転糸切り	焼成不良、内外面摩滅	
19	SB104	須	杯A	14.4	6.6	4.6	1/3	1/2	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕	
20	SB104	黒	杯A	12.4	6.0	3.9	1/3	1/2	放射状ミガキ、ロクロナデ、回転糸切り?	摩滅	
21	SB104	灰	皿	14.4	6.8	3.4	3/4	完	ロクロナデ、回転ケズリ、ツケ高台、ハケヌリ		
22	SB104	土	小型甕		5.7			欠	完	カキメ、回転糸切り	
23	SB105	須	杯A	12.7	6.0	4.0	3/4	完	ロクロナデ、回転糸切り、わずかな黒斑	体部外面墨書、写真	
24	SB105	須	杯A		6.4			欠	1/3	ロクロナデ、回転糸切り	
25	SB105	黒	杯A	13.0	6.1	3.8	1/4	完	黒ヌケ、ロクロナデ、回転糸切り	内外面摩滅	
26	SB105	黒	杯A		6.8			欠	5/6	ロクロナデ、回転糸切り	
27	SB105	灰	碗	16.2	7.9	5.0	1/4	1/4	ロクロナデ、回転ケズリ、ツケ高台、内面のみ流し掛け	K-14	
28	SB109	須	杯A	12.8	5.4	3.8	2/3	1/2	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕、長石特大粒	
29	SB109	須	杯A	12.9	5.5	4.5	1/5	3/4	ロクロナデ、回転糸切り	長石特大粒	
30	SB109	須	杯A		7.0			欠	1/4	ロクロナデ、回転糸切り	酸化焙焼成
31	SB109	須	杯B	14.3				1/5	欠	ロクロナデ	酸化焙焼成
32	SB109	黒	杯A	12.5	5.9	3.9	1/2	7/8	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り		
33	SB109	黒	杯A	13.0	6.2	4.3	1/3	完	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り		
34	SB109	黒	杯A	13.5	5.5	4.1	1/8	1/2	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り	外面摩滅	
35	SB109	黒	碗	14.4	6.6	5.2	1/4	1/4	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り、ツケ高台		
36	SB109	土	小型甕	13.2				1/4	欠	ロクロナデ	
37	SB109	土	小型甕		6.6			2/3	カキメ、ロクロナデ、内面ミガキ、回転糸切り後ナデ消し		
38	SB109	土	小型甕		7.3			欠	完	カキメ、回転糸切り	
39	SB109	土	甕		10.5			欠	3/4	カキメ、非回転横ケズリ、底面押圧平坦化	
40	SB109	土	甕B		10.2			欠	1/4	ハケメ、工具ナデ、底面押圧平坦化	
41	SB109	土	甕B		9.0			欠	1/4	ハケメ、ケズリ、底面押圧平坦化	
42	SB109	土	小型甕		8.3			欠	3/4	ケズリ、ハケメ状後横ナデ	武蔵甕の台付小型甕
43	SB109	須	壺		9.1			欠	欠	ロクロナデ、回転ケズリ、ツケ高台	酸化焙焼成、径は高台付け根
44	SB110	須	杯A	12.2	5.6	3.3	1/6	2/3	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕	
45	SB110	須	杯A	14.2	7.0	3.7	1/2	完	ロクロナデ、回転糸切り	遺構間接合、一部焼成不良	
46	SB110	須	杯A	12.8	6.2	3.8	2/3	完	ロクロナデ、回転糸切り	酸化焙焼成	
47	SB110	須	杯A	13.5	6.1	3.5	3/4	3/4	ロクロナデ、回転糸切り	遺構間接合、重ね焼き痕	
48	SB110	須	杯A	13.8	5.9	3.7	1/12	1/2	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕	
49	SB110	須	杯A	13.0	6.5	3.5	1/8	1/2	ロクロナデ、回転糸切り	底部・体部外面に火燬痕	
50	SB110	須	杯A	12.8	5.5	3.7	1/6	完	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕	
51	SB110	須	杯A	12.3	5.9	3.5	15/16	完	ロクロナデ、回転糸切り	酸化焙焼成、重ね焼き痕	
52	SB110	須	杯A	12.3	5.9	3.3	完	完	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕	
53	SB110	須	杯A	13.9	5.4	4.1	1/2	完	ロクロナデ、回転糸切り	酸化焙焼成	
54	SB110	須	杯A	13.7	6.4	3.6	1/4	3/4	ロクロナデ、回転糸切り	遺構間接合、重ね焼き痕	
55	SB110	須	杯A	13.1	5.2	3.9	1/8	1/6	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕	
56	SB110	黒	杯A	12.7	5.7	3.6	4/5	完	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り		
57	SB110	土	小型甕		6.8			欠	完	カキメ、ロクロナデ、回転糸切り	
58	SB110	土	小型甕		6.4			欠	2/5	カキメ、ロクロナデ、回転糸切り	

第1表 土器一覧表(1/2)

No	地点	種別	器種 器形	寸法			残存		成形・調整など	その他・備考
				口径	底径	器高	口縁	底部		
59	SB110	土	甕B		7.6		欠	3/4	ハケメ、内面工具ナデ、底部押圧平坦化	
60	SB110	須	短頸壺		11.9		欠	3/4	回転ケズリ、内面全面的に窯内付着物、ツケ高台	
61	SB111	軟	杯A	13.2	5.4	4.1	1/3	1/2	ロクロナデ、回転糸切り	外面に大きな黒斑、摩滅
62	SB111	黒	杯A	12.6	5.8	4.2	1/6	1/2	ロクロナデ、ミガキ、回転糸切り?	
63	SB111	黒	杯A	13.2	5.0	4.2	3/5	3/4	ロクロナデ、ミガキ?、回転糸切り?	全体的に摩滅・剥落
64	SB111	黒	杯A	17.1	7.1	5.2	1/3	1/2	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り	杯A大、遺構間接合
65	SB111	黒	椀	14.0	6.9	5.0	1/6	1/3	ロクロナデ、漬け掛け	
66	SB111	灰	椀		9.1		欠	11/12	ロクロナデ、回転ケズリ、ツケ高台、ハケヌリ	
67	SB111	黒	皿	12.7	5.8	2.7	1/8	3/4	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り、ツケ高台	摩滅
68	SB111	黒	鉢	19.0			1/6	欠	ロクロナデ、外面下部焼成後粘土塗付?	内面かなり黒ヌケ、摩滅
69	SB111	土	小型甕	15.2			1/4	欠	カキメ、ロクロナデ	
70	SB112	須	蓋B	15.7		3.0	1/4	-	ロクロナデ、回転ケズリ	
71	SB112	須	壺蓋	13.7		4.8	1/3	-	ロクロナデ、回転ケズリ	
72	SB112	須	杯B	17.7			1/4	欠	ロクロナデ	
73	SB112	須	杯B	9.3	5.6	4.5	完	完	ロクロナデ、回転糸切り、ツケ高台	酸化焰焼成、完形品
74	SB112	須	杯B		7.2		欠	完	ロクロナデ、回転糸切り、ツケ高台	酸化焰焼成
75	SB112	須	杯A	12.8	6.3	3.7	1/8	1/6	ロクロナデ、回転糸切り	内外面火燻痕
76	SB112	須	杯A	12.8	5.6	3.9	完	完	ロクロナデ、回転糸切り	酸化焰焼成、底面墨書、写真
77	SB112	須	杯A	13.0	5.8	4.1	3/4	完	ロクロナデ、回転糸切り	内外面火燻痕、底面墨書、写真
78	SB112	須	杯A	13.8	6.6	4.0	1/3	1/4	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕
79	SB112	須	杯A	12.8	6.1	3.8	9/10	完	ロクロナデ、回転糸切り	酸化焰焼成、内外面火燻痕、重ね焼き痕
80	SB112	須	杯A	13.0	6.1	3.9	2/3	9/10	ロクロナデ、回転糸切り	重ね焼き痕
81	SB112	須	杯A	14.1	7.0	3.6	1/3	1/2	ロクロナデ、回転糸切り	遺構間接合、酸化焰焼成
82	SB112	須	杯A	13.4	6.6	3.9	2/5	5/6	ロクロナデ、回転糸切り	遺構間接合、酸化焰焼成、重ね焼き痕
83	SB112	須	杯A	12.7	5.4	3.5	1/2	3/4	ロクロナデ、回転糸切り	遺構間接合、重ね焼き痕
84	SB112	須	杯A	13.8	5.9	3.6	1/4	1/2	ロクロナデ、回転糸切り	内外面火燻痕、重ね焼き痕
85	SB112	黒	杯A	13.8	5.4	3.9	1/4	完	ロクロナデ、回転糸切り	内外面摩滅
86	SB112	須	短頸壺	9.1	6.3	12.4	1/2	完	ロクロナデ、回転糸切り	胴部完
87	SB113	須	杯A	12.4	5.4	3.7	完	完	ロクロナデ、回転糸切り	一部酸化焰焼成、重ね焼き痕
88	SB113	須	杯A	12.6	5.8	3.8	1/4	1/4	ロクロナデ、回転糸切り	
89	SB113	黒	杯A	13.6	7.2	3.9	1/4	1/3	ロクロナデ、丁寧なミガキ、回転糸切り	内面墨痕かタール状付着物
90	SB113	黒	杯A	15.0	7.7	4.0	1/2	完	ロクロナデ、不定方向ミガキ、回転ヘラケズリ	内面ミガキ丁寧
91	SB113	土	甕	15.5			1/4	欠	ヨコナデ、工具ナデ	類例をみない甕、摩滅
92	SB113	土	甕C	19.8			1/8	欠	ヨコナデ、外面ケズリ、内面工具ナデ	武蔵甕、焼成極めて良好
93	C-SK33	須	杯A	13.5	6.0	3.8	1/3	2/5	ロクロナデ、回転糸切り	
94	C-SK33	須	杯A	13.9	6.1	3.6	1/8	1/2	ロクロナデ、回転糸切り	酸化焰焼成
95	C-SK33	須	杯A		6.3		欠	1/3	ロクロナデ、回転糸切り	酸化焰焼成、摩滅
96	C-SK33	黒	杯A	13.3	6.2	3.5	1/3	2/5	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り	遺構間接合、外面摩滅
97	C-SK33	黒	杯A	12.6			1/4	欠	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り	丁寧なミガキ
98	C-SK33	黒	椀	12.6	7.0	4.7	3/5	完	ロクロナデ、放射状ミガキ、回転糸切り、ツケ高台	遺構間接合、雑なミガキ
99	C-SK33	黒	鉢	26.8			1/10	欠	ロクロナデ、放射状ミガキ、工具ナデ、手持ちケズリ	雑なミガキ
100	C-SK33	灰	長頸壺	4.9			7/8	欠	ロクロナデ、絞りのちロクロナデ	
101	C-SK33	須	長頸壺		10.7		欠	1/3	ロクロナデ、回転ケズリ、底部押圧平坦化、ツケ高台	自然釉か
102	地点不明	須	杯B	15.3	8.4	6.5	1/3	1/3	ロクロナデ、回転糸切り、ツケ高台	
103	NKYH	土	カワラケ	7.5	5.0	2.1	1/4	1/4	ロクロナデ、回転糸切り	
104	NKYH	土	カワラケ	8.1	5.3	2.1	1/4	1/4	ロクロナデ、回転糸切り	
105	NKYC	磁	椀	7.8	3.4		1/3	完	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、ケズリ出し高台	染付のち透明釉、呉須、青海波、高台圏線
106	NKYC	磁	椀	10.9	3.7	5.1	1/12	完	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、ケズリ出し高台	染付のち透明釉、内部円内に松竹梅・圏線
107	NKYC	陶	椀	9.3	3.8	5.1	?	?	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、ケズリ出し高台	口縁一部に呉須のち灰釉
108	NKYC	土	鉢		11.0		欠	2/5	外面・底部回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ	重ね焼き痕
109	NKYC	陶	甕		19.4		欠	僅か	粘土巻き上げのち外面工具ナデ、内面指頭圧痕・工具ナデ	錆釉
110	NKYC	陶	播鉢		11.0		欠	完	回転ヘラケズリ、内面ロクロナデのち摺目、外面回転ヘラケズリ	錆釉、拓本
111	NKYC	瓦質	炬燵か 焔炉						外面ミガキ・ケズリ、内面凸帯貼付のちナデ	瓦質陶器、破片実測
112	NKYC	瓦質	火鉢		18.4		欠	1/2	外面胴部八角形型打ち施文、ツケ高台、内面ロクロナデ	瓦質陶器、拓本

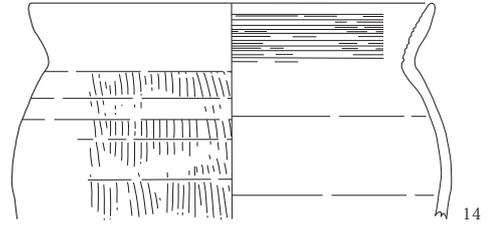
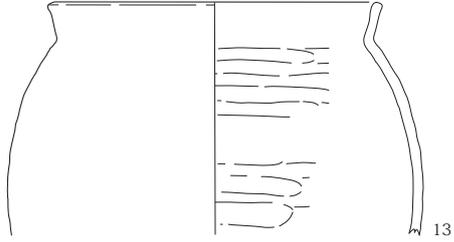
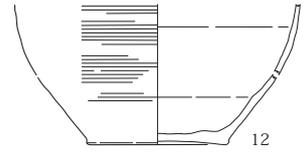
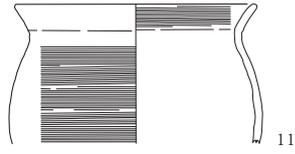
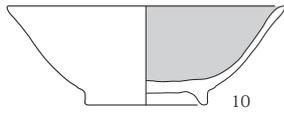
第1表 土器一覧表(2/2)

縄文土器 (1 ~ 9)

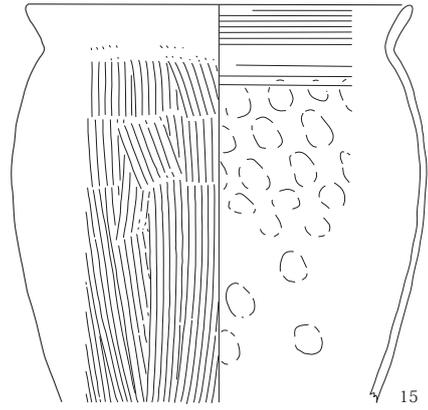
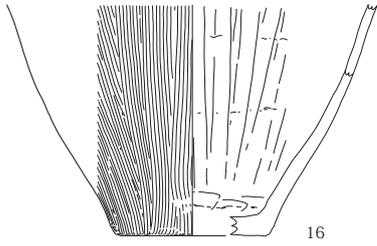


第6図 出土土器陶磁器実測図(1)

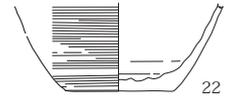
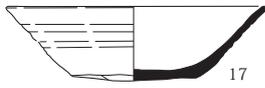
古代土器・陶器
SB102(10 ~ 15)



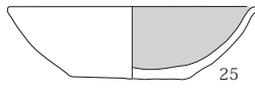
SB103(16)



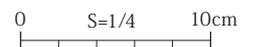
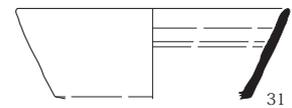
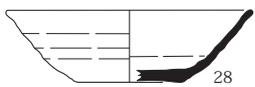
SB104(17 ~ 22)



SB105(23 ~ 27)

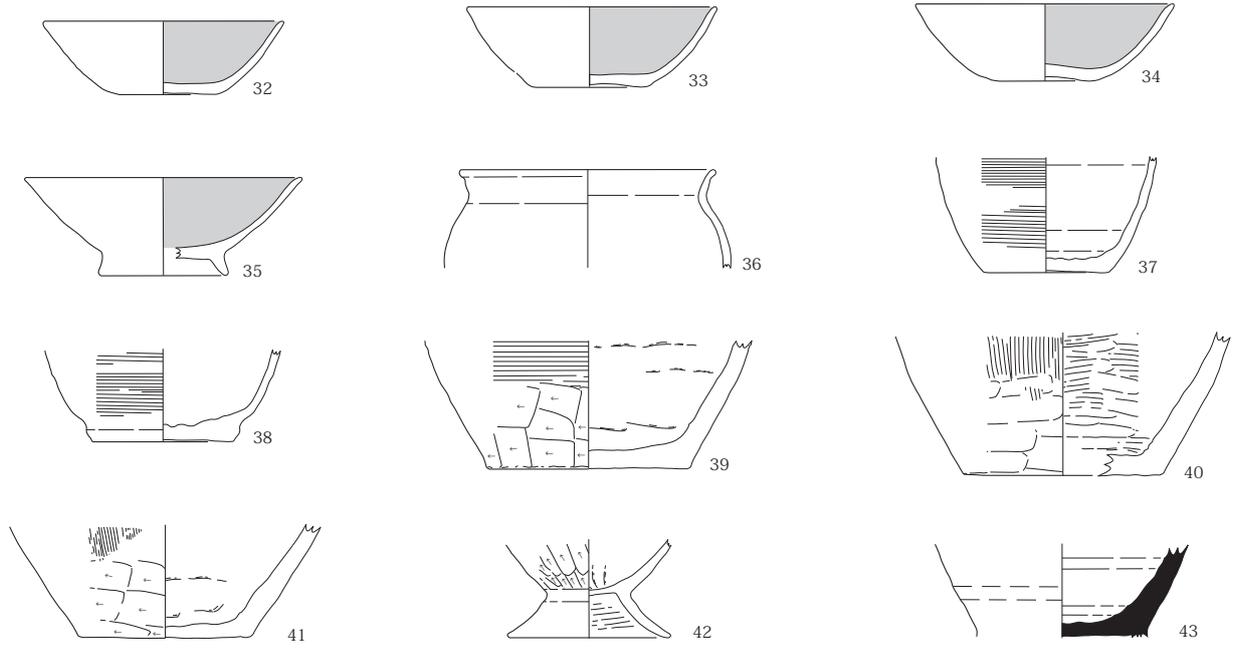


SB109①(28 ~ 31)

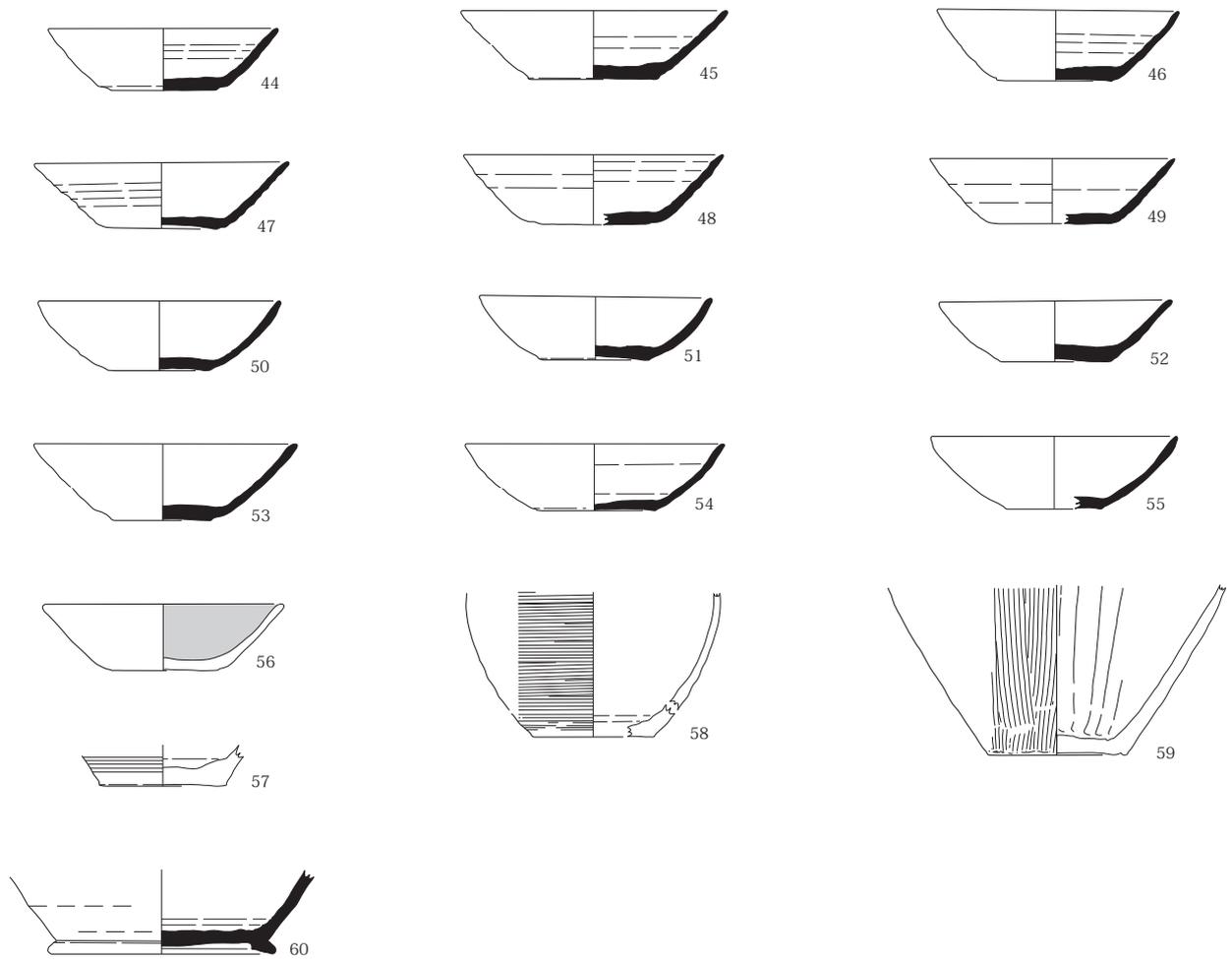


第7図 出土土器陶磁器実測図(2)

SB109②(32 ~ 43)



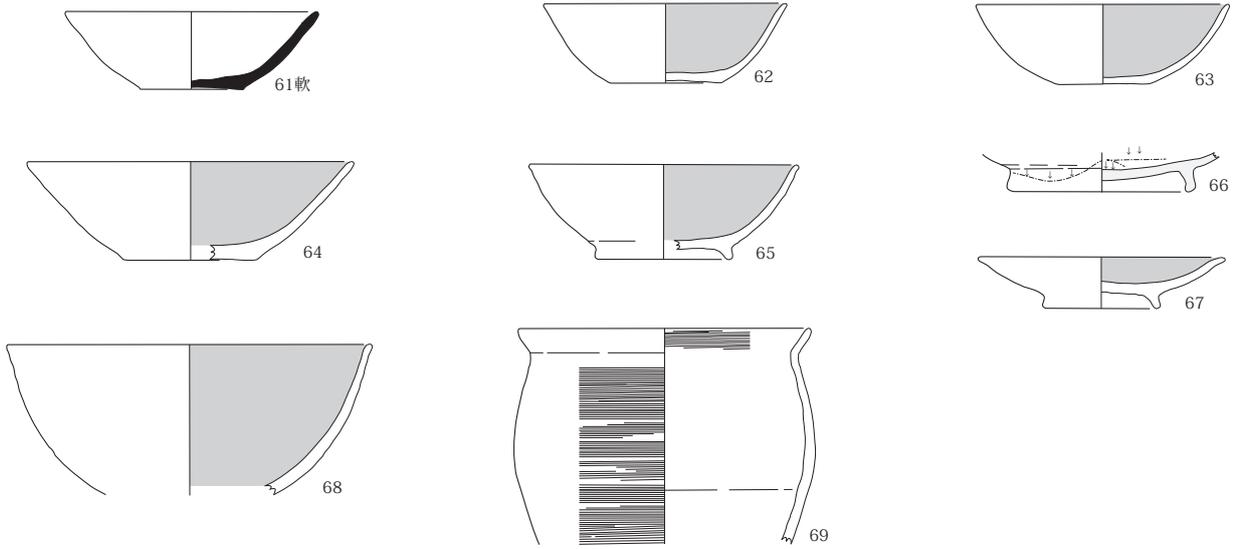
SB110(44 ~ 60)



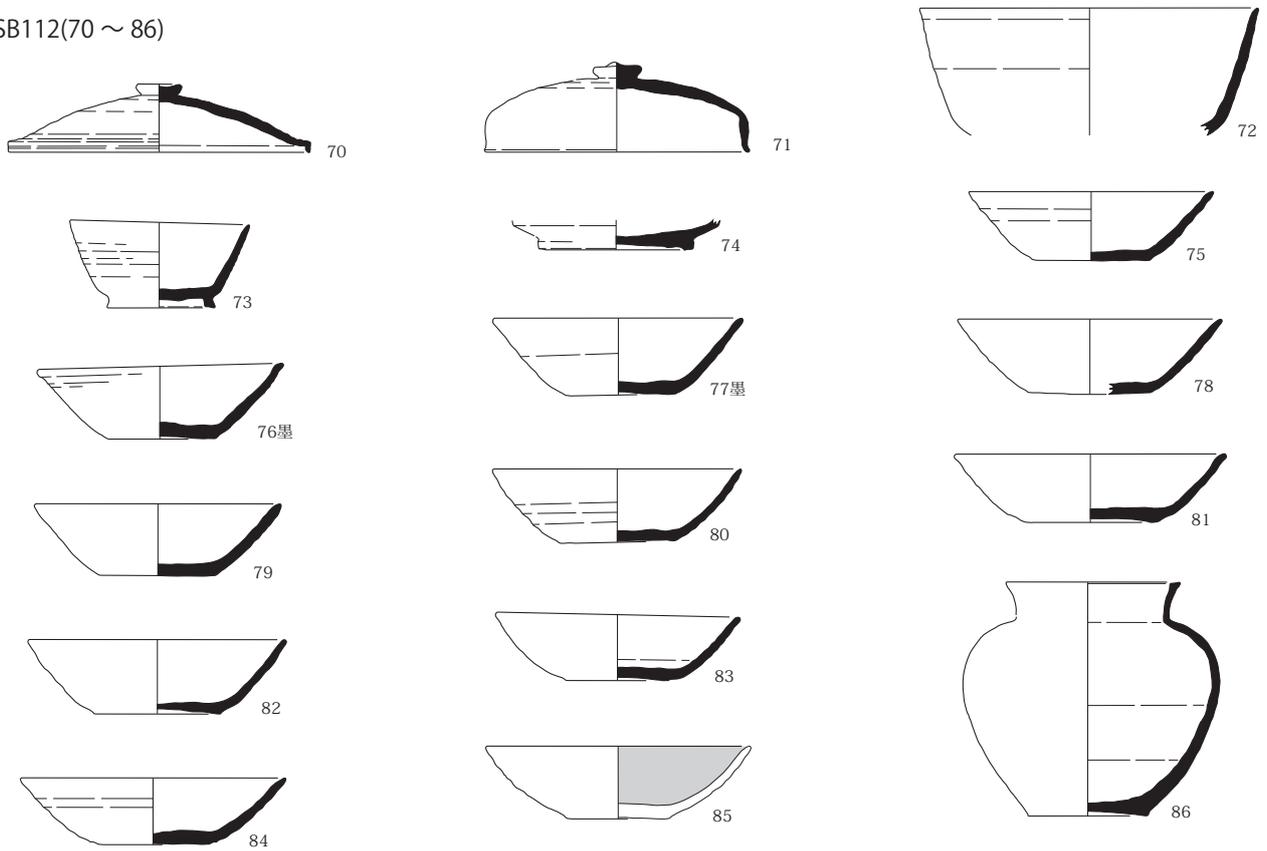
0 S=1/4 10cm

第 8 图 出土土器陶磁器実測图 (3)

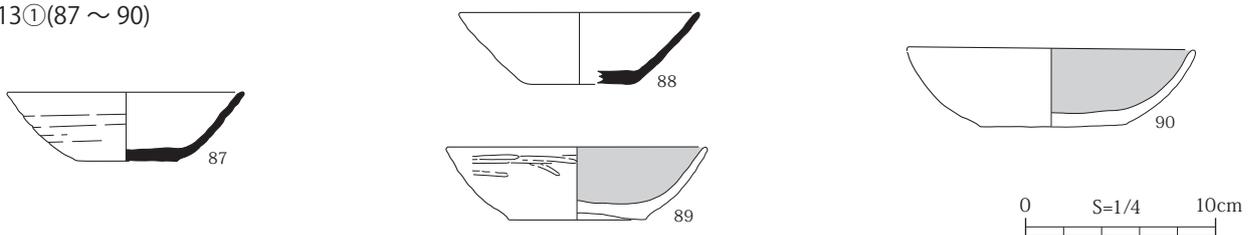
SB111(61 ~ 69)



SB112(70 ~ 86)

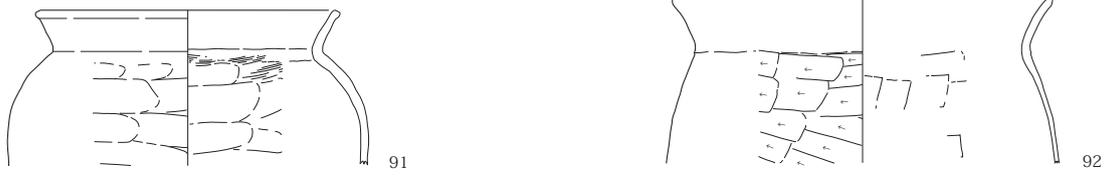


SB113①(87 ~ 90)

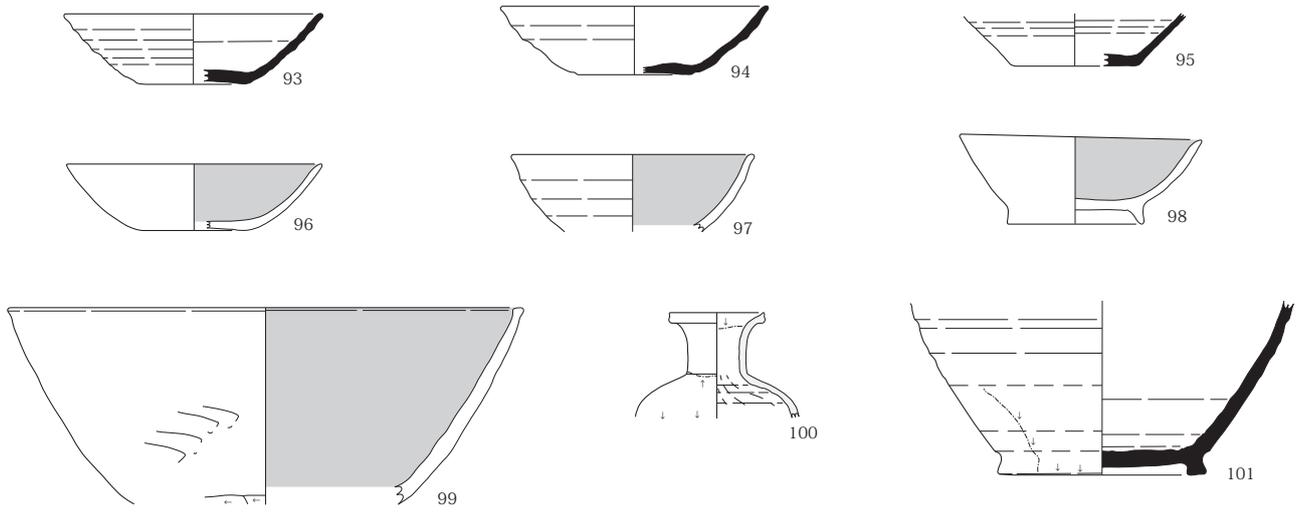


第9図 出土土器陶磁器実測図(4)

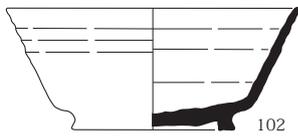
SB113②(91・92)



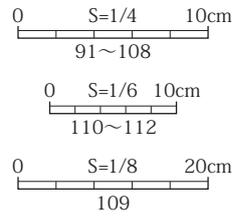
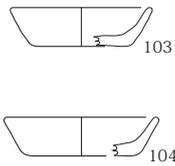
C-SK33(93 ~ 101)



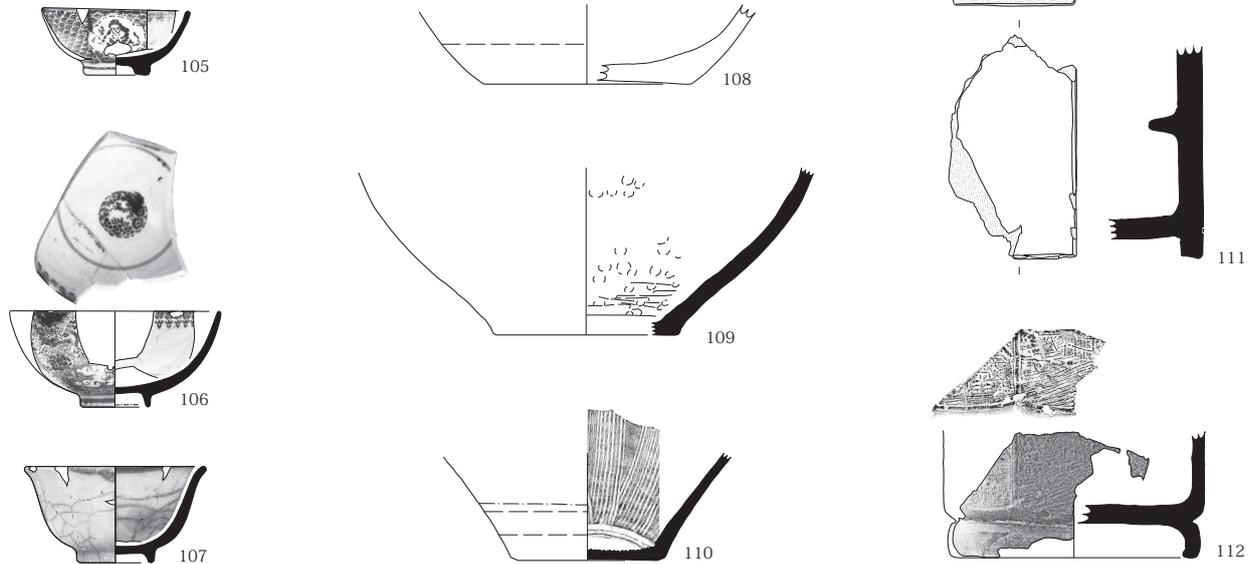
出土地点不明 (102)



中世土器 (103・104)



近世陶磁器 (105~112)



第 10 图 出土土器陶磁器实测图 (5)

2 石器・石製品（第2表・第11図）

今回の調査で出土した石器・石製品の総数は258点である。その内訳は、石鏃14点、石錐3点、小形刃器11点、楔形石器7点、打製石斧12点、大形刃器7点、磨製石斧1点、砥石26点、硯1点、磨石類9点、石皿1点、石臼1点、火打石1点、炉石1点、不明石製品1点、石核3点、二次加工ある剥片8点、微細剥離ある剥片7点、剥片・碎片144点である。このうち、遺構出土で遺存状態が良く、縄文時代に帰属すると考えられる定型石器を中心に18点を図示し、概要を述べる。また、二次加工ある剥片、微細剥離ある剥片、剥片・碎片については、それぞれの点数のみ提示した。石器・石製品の帰属時期は共伴する土器に準じると推定される。

(1) 石鏃(1～9) 9点図示した。いずれも無茎鏃に分類される。使用される石材は、黒曜石が大半を占め、チャートや珪質頁岩も含まれる。この他に、下呂石製のものも1点確認できた(8)。平面形状をみると、基部の挟りの深さや長軸と短軸の縦横比の大きさなど、バリエーションが多くみられる。1・2は、基部の挟りが深く、二等辺三角形の平面形を呈している。3・7も、二等辺三角形を呈しているが、基部の挟りが浅く作られている。また、五角形鏃(5)や平基鏃(8)の出土も確認できた。

(2) 石錐(10) 石錐として分類した3点のうち1点を図示した。10は黒曜石製で、平面形が逆三角形を呈している。錐部の使用痕は不明瞭である。

(3) 小形刃器(11) 11はやや大ぶりではあるが小形剥片石器に使用される黒曜石製であるため、小形刃器として扱った。刃部の断面角度が緩斜度(60度未満)であることから、サイドスクレーパー(削器)に分類できる。

(4) 磨製石斧(12) 磨製石斧の出土は1点のみ確認できた。12は基部のみの残存ではあるが、そのサイズから小形のものであると推定できる。

(5) 打製石斧(13～18) 打製石斧の総出土点数は12点で、石鏃と並び最も多く出土した器種に数えられる。石材は、ホルンフェルスや粘板岩、頁岩がみられ、いずれも在地で産出する石材が使用されている。13は、やや小ぶりの撥型を呈している。14～16は、短冊型を呈している。17・18は、他の打製石斧に比べ大形で、篋状に近い平面形を呈している。

縄文石器の全体的な傾向として、打製石斧が他器種と比較し多く出土していることから、中部地方の縄文時代中期の様相と同じ状況を呈している。石鏃に関しては、基部の挟りが浅いものや平基鏃等、縄文時代中期後半によくみられるような形態のものも確認できた。この他、楔形石器の出土点数が7点と割合的に多くみられることも本遺跡の特徴としてあげられる。また、砥石も多く出土している器種であるが古代～近世に帰属する個体も少なからずみられたり、古代の遺構覆土に縄文石器が多数混入していることもあり、全体的な傾向を論じるには、やや注意が必要である。

3 金属製品（第3表・第11図）

鉄製品14点、銅製品9点、鉄滓3点が出土した。鉄製品は錆化、破損が著しく器種を明確に特定できるものはない。銅製品は銭貨、煙管、簪である。銭貨は開元通宝、永楽通宝、寛永通宝と判読できないものが各1点ずつで、近世の墓址に伴ったものとする。金属製品は全般的に近世から近代に属するものが多い。古代の遺構から出土したのも近世以降の混入品の可能性がある。

ID	図 No.	器種	地点	石材	長/口径 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考
1		大形刃器	SB101	ホルンフェルス	4.46	3.78	0.63	8.0	完形	横刃形石器、刃部1側縁
2		砥石	SB101	砂岩	23.64	11.23	5.28	2180.0	完形	平面：不整長方形、断面：隅丸長方形、砥面2、荒砥、被熱
3		砥石	SB101	砂岩	(17.72)	(9.74)	(5.41)	(1088.0)	2/3欠	砥面1、中砥
4		炉石か	SB101	花崗岩か	18.71	21.35	6.05	2735.0	完形	被熱著しい
5	6	石鏃	SB103	チャート	2.82	(1.31)	0.25	(0.8)	1/4以下欠	無茎凹基鏃、片脚部欠損
6		打製石斧	SB104	ホルンフェルス	(7.18)	(7.97)	(2.32)	(155.6)	1/3欠	撥形、刃部・頭部欠損
7		磨石類	SB105	安山岩	19.03	(14.81)	6.89	(3001.0)	1/3欠	平面：不整形、断面：不整形、凹み1面(φ6.85cm・深さ1.11cm)
8	1	石鏃	SB108	黒曜石	2.65	(1.36)	0.37	(0.7)	1/4欠	無茎凹基鏃、片脚部欠損、鋸歯状
9	2	石鏃	SB108	黒曜石	1.65	1.24	0.28	0.3	完形	無茎凹基鏃
10		小形刃器	SB108	黒曜石	2.89	1.94	0.79	3.4	完形	削器、刃部1側縁
11		砥石	SB108	頁岩	(6.46)	(1.55)	3.99	(62.4)	3/4以上欠	砥面2、仕上砥、線条研磨痕あり
12		磨石類	SB109	安山岩	8.39	7.31	6.01	511.0	完形	平面：楕円形、断面：楕円形、磨面2、凹部側2
13		石鏃	SB111	黒曜石	(1.08)	(1.15)	(0.29)	(0.3)	2/3欠	基部欠損
14		石鏃	SB111	黒曜石	(1.24)	(0.76)	(0.22)	(0.2)	2/3欠	基部の一部のみ残存
15	5	石鏃	SB111	黒曜石	(1.07)	(1.21)	0.29	(0.3)	1/4以下欠	無茎凹基鏃、片脚部欠損
16	7	石鏃	SB111	珪質頁岩	(3.14)	1.42	0.48	(1.8)	1/4以下欠	無茎凹基鏃、先端部欠損
17		石鏃か	SB111	黒曜石	(1.84)	0.96	0.32	(0.6)	1/4欠	鏃部欠か
18	11	石鏃	SB111	黒曜石	2.92	1.69	1.09	4.2	完形	鏃部断面三角形、つまみ部なし
19	10	小形刃器	SB111	黒曜石	4.82	3.77	1.03	18.4	完形	削器、刃部1側縁
20		小形刃器	SB111	黒曜石	(1.74)	(1.90)	(0.53)	(1.5)	1/2欠	削器、刃部1側縁
21		小形刃器	SB111	黒曜石	2.08	2.02	0.57	1.5	完形	削器、刃部1側縁
22		楔形石器	SB111	黒曜石	2.02	2.12	0.87	2.9	完形	上下端に打点
23		楔形石器	SB111	黒曜石	1.98	1.31	0.48	1.1	完形	打点1点、反対側に打辺1側縁
24		楔形石器	SB111	黒曜石	1.86	1.37	0.49	1.2	完形	上下端に打点
25		楔形石器	SB111	黒曜石	1.32	1.27	0.40	0.7	完形	3カ所に打点
26		楔形石器か	SB111	黒曜石	2.66	1.22	0.85	2.3	完形	上下端に打点
27	3	石鏃	SB112	黒曜石	(1.62)	(13.80)	0.45	(0.9)	1/4欠	無茎凹基鏃、先端部・片脚部欠損
28	4	石鏃	SB112	黒曜石	1.26	(1.01)	0.26	(0.2)	1/4欠	無茎凹基鏃、片脚部欠損
29		石鏃	SB112	黒曜石	(1.00)	(1.24)	0.35	(0.4)	1/3欠	無茎凹基鏃、先端部・片脚部欠損
30		小形刃器	SB112	チャート	4.73	2.34	0.67	5.9	完形	削器、刃部1側縁
31		打製石斧	SB112	ホルンフェルス	(10.16)	(5.33)	1.58	(64.0)	1/2欠	撥形
32		石核	SB112	黒曜石	2.40	2.11	1.31	4.8	完形	剥離面2
33		砥石	SB112	ホルンフェルス	13.24	4.99	4.92	369.0	完形	砥面2、中砥
34		砥石	SB113	砂岩	28.08	10.71	2.62	1150.0	完形	平面：不整楕円形、断面：不整長方形、砥面1、荒砥
35	17	打製石斧	SK2	ホルンフェルス	12.37	10.03	2.24	360.0	完形	撥形と短冊形の間
36	18	打製石斧	SK2	粘板岩	13.38	10.15	2.63	46.2	完形	撥形と短冊形の間
37		打製石斧	SK2	ホルンフェルス	(4.23)	(3.56)	(0.95)	(17.2)	1/2欠	撥形か、刃部欠損
38		砥石	SK2	砂岩	5.25	4.38	0.92	33.2	完形	平面：楕円形、断面：扁平、砥面2、荒砥
39		砥石	SK5	頁岩	(9.13)	(3.99)	2.76	(163.3)	2/3欠	平面：隅丸長方形か、断面：長方形か、砥面2、仕上砥、線条研磨痕あり
40		砥石	SK5	粘板岩	28.83	12.54	(3.98)	(1910.0)	1/3欠	平面：長方形、断面：長方形か、砥面1、中砥
41		砥石 or 硯	SK5	粘板岩	(12.38)	(6.74)	(1.21)	(114.0)	3/4以上欠	整形面1、ID40と同一個体の可能性
42		砥石	SK9	頁岩	(16.68)	(6.33)	(2.43)	(179.4)	1/2欠	砥面2、中砥
43		磨石類	SK11	砂岩	(11.82)	4.94	(3.14)	(246.8)	1/2欠	被熱
44		砥石	SK14	頁岩	(5.95)	(1.56)	2.73	(46.5)	3/4以上欠	砥面2、仕上砥、線条研磨痕あり
45		砥石	SK15	頁岩	(14.22)	(3.44)	(1.67)	(80.4)	3/4以上欠	砥面1、仕上砥、線条研磨痕あり
46		砥石	SK15	頁岩	(13.38)	(3.06)	(1.73)	(56.2)	3/4以上欠	砥面2、仕上砥、2片に分離
47		砥石	SK15	頁岩	(9.20)	(2.99)	(2.41)	(93.0)	1/2欠	砥面3、仕上砥
48		砥石	SK17	玢岩	9.05	2.63	3.11	169.9	完形	平面：方形、断面：長方形、砥面2、仕上砥
49		小形刃器	SK23	黒曜石	2.90	2.29	0.75	5.2	完形	削器、刃部2側縁
50		小形刃器	SK23	黒曜石	(2.01)	1.43	0.68	(1.3)	1/4以下欠	削器、刃部2側縁
51		打製石斧	SK23	頁岩	8.32	4.94	1.55	67.2	完形	撥形
52		磨石類	SK23	安山岩	16.23	11.72	6.54	1520.0	完形	平面：楕円、断面：楕円、磨面2、凹部表4・側2
53		楔形石器	SK24	黒曜石	2.60	1.58	0.81	3.4	完形	上下端に打点、微細剥離1側縁
54	8	石鏃	SK27	下呂石	2.64	1.53	0.47	1.7	完形	無茎平基鏃、五角形鏃
55	16	打製石斧	SK28	ホルンフェルス	(10.40)	4.34	2.16	(112.0)	1/4以下欠	短冊形
56		打製石斧	SK30	頁岩	(7.08)	(4.62)	1.38	(45.8)	1/2欠	撥形
57		大形刃器	SK30	頁岩	8.19	2.92	1.16	29.4	完形	平面：長方形、刃部2側縁
58		大形刃器	SK30	頁岩	6.41	5.31	1.22	46.4	完形	平面：不定形、刃部2側縁
59		磨石類	SK30	安山岩	(9.49)	(6.64)	(9.16)	(844.0)	3/4欠	磨面2、若干被熱か
60		磨石類か	SK30	頁岩	(15.60)	(9.41)	(3.37)	(619.0)	2/3欠	磨面1?
61		砥石	SK30	頁岩	(14.33)	8.70	(2.68)	(404.0)	1/2欠	平面：長方形か、砥面2、仕上砥、線条研磨痕あり
62		砥石	SK30	頁岩	(8.73)	(4.45)	3.26	(187.4)	1/2欠	砥面2、仕上砥、線条研磨痕あり
63		砥石	SK30	流紋岩	9.13	3.46	1.48	68.0	完形	砥面1、中砥
64		石皿	SK30	砂岩	(19.29)	25.82	7.75	(4661.0)	1/3欠	平面：隅丸方形、断面：扁平楕円形、凹み1面(縦幅残存(10.45)cm・横幅13.93cm・深さ0.82cm)
65		大形刃器	SK32	ホルンフェルス	11.97	4.86	2.12	123.6	完形	刃部3側縁
66		火打石	SK32	チャート・石英	4.48	2.56	1.68	19.2	完形	1側縁使用
67		打製石斧	SK33	頁岩	(13.42)	(5.91)	(2.37)	(193.4)	1/4欠	撥形

第2表 石器一覧表(1/2)

ID	図 No.	器種	地点	石材	長/口径 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	破損状況	備考
68		小形刃器	SK40	黒曜石	2.23	1.45	0.55	1.6	完形	削器、刃部1側縁
69		石臼	SK46	安山岩	(10.22)	-	(13.82)	(1419.0)	3/4欠	茶臼の小白か、溝なし
70	14	打製石斧	SK103	ホルンフェルス	9.60	5.16	1.26	69.7	完形	分銅形
71	9	石鏃	SK111	黒曜石	1.89	(1.23)	0.31	(0.6)	1/4以下欠	無茎凹基鏃、片脚部欠損
72		磨石類	SK111	砂岩	19.64	16.10	10.02	3682.0	完形	平面：不整形円形、断面：楕円形、磨面2、凹部表4・裏5
73		磨石類か	SK111	安山岩	(35.48)	14.39	(11.33)	(6658.0)	1/4欠	磨面2？
74		石核	SK111	黒曜石	5.05	2.99	1.97	24.3	完形	剥離面5
75		磨石類	SK119	砂岩	9.35	9.14	2.49	244.2	完形	平面：隅丸三角形、断面：扁平な楕円形、凹み面1(φ3.76cm・深さ0.32cm)、敲打部2
76	13	打製石斧	P10	ホルンフェルス	7.64	4.58	1.05	40.5	完形	撥形
77		小形刃器	P11	チャート	(5.97)	3.44	1.47	(24.0)	1/4以下欠	削器、刃部2側縁
78	15	打製石斧	P21	頁岩	12.07	5.28	1.13	89.7	完形	撥形
79		小形刃器	P53	チャート	3.02	1.75	0.72	3.1	完形	削器、刃部1側縁
80		楔形石器	P59	黒曜石	1.87	1.59	0.74	2.1	完形	4カ所に打点
81		石核	P63	チャート	4.50	3.69	3.30	55.7	完形	
82		砥石	P72	頁岩	(6.50)	1.07	2.05	(21.6)	3/4以上欠	破片、砥面2、仕上砥、線条研磨痕あり
83		大形刃器	P77	頁岩	9.71	7.26	1.49	102.9	完形	刃部1側縁
84		石鏃	P83	チャート	2.30	2.58	0.51	2.8	完形	無茎凹基鏃、三角形鏃
85		大形刃器	P110	頁岩	7.69	4.19	2.00	59.6	完形	横刃形石器、刃部1側縁
86		不明石製品	P114	頁岩	6.82	2.45	1.27	26.9	完形	穿孔様の加工あり(推定φ2.10cm・両面穿孔)
87		砥石	暗渠	頁岩	5.23	(3.92)	(1.91)	(42.2)	1/2欠	平面：長方形か、砥面3、中砥、線条研磨痕あり
88		砥石	NKYA	頁岩	(11.63)	5.67	3.49	(286.4)	1/3欠	平面：長方形、断面：長方形、砥面2、仕上砥、線条研磨痕あり
89		砥石	NKYA	頁岩	(13.66)	(8.51)	(2.65)	(114.9)	3/4以上欠	砥面1、仕上砥、線条研磨痕あり
90		石鏃か	NKYB	黒曜石	(1.84)	1.02	0.66	(1.6)	2/3欠	鏃部断面台形、基部端部・鏃部先端欠損
91		大形刃器	NKYF	頁岩	10.25	4.21	1.16	46.5	完形	横刃形石器、刃部2側縁
92	12	磨製石斧	NKYG	蛇紋岩	(1.37)	(1.79)	(0.58)	(2.0)	3/4欠	
93		石鏃	NKYH	チャート	(1.80)	(1.60)	0.43	(1.4)	1/4欠	基部欠損
94		小形刃器	NKYH	黒曜石	2.84	1.93	0.76	3.3	完形	削器、刃部1側縁、微細剥離1側縁
95		砥石	NKYH	頁岩	9.72	2.45	2.25	92.1	完形	平面：不整形、断面：台形、砥面1、荒砥
96		硯	NKYI	頁岩	(4.87)	(3.13)	1.59	(30.0)	3/4以上欠	裏面に刻字「硯」の一部か
97		砥石		頁岩	17.96	4.52	3.88	416.0	完形	平面：不整形長方形、断面：長方形、砥面4、仕上砥、線条研磨痕あり
98		砥石か		頁岩	(7.31)	(6.58)	(5.02)	(462.0)	3/4欠	平面：長方形か、砥面1、仕上砥、線条研磨痕あり
99		砥石か		頁岩	13.11	(6.98)	(4.15)	(616.0)	2/3欠	平面：長方形か、砥面3、仕上砥、線条研磨痕あり

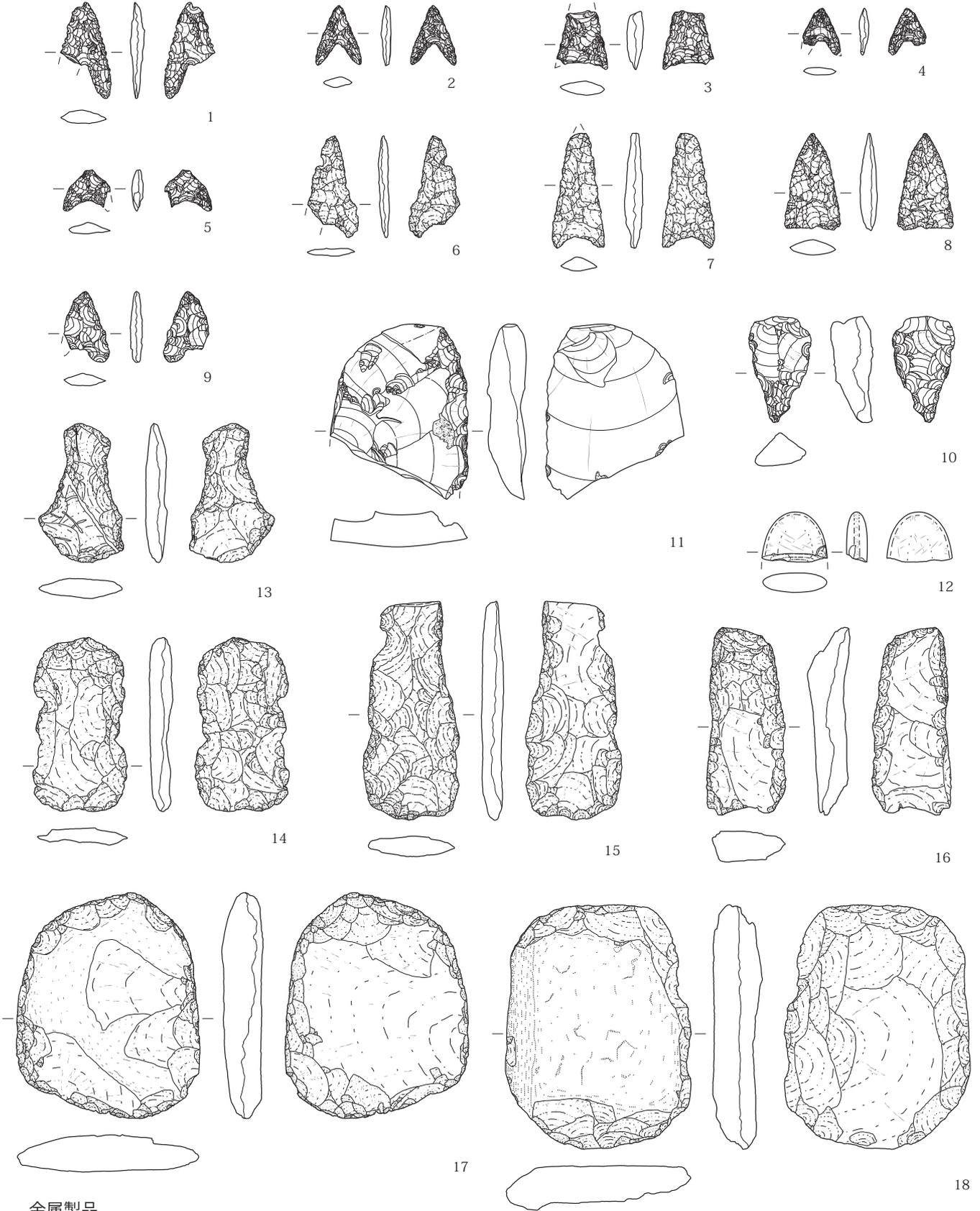
計測値の()は残存値を示す

第2表 石器一覧表(2/2)

ID	遺構	地点等	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	金属 種別	備考
1	SB104	No.6	刀子？	92.0	11.5	6.6	12.1	Fe	2片に折損
2	SB109	P-5	板状不明				55.4	Fe	20数片に分離破損
3	SB111	No.54	滓				165.1	Fe	
4	SB111	東北1/4	板状不明			3.0	7.4	Fe	3片に折損
5	SB111	東北1/4	棒状不明	33.1	6.1	6.1	1.8	Fe	
6	B-SK8		煙管	65.8	9.8	9.8	7.5	Cu	破損
7	B-SK11		棒状不明			6.2	127.3	Fe	
8	C-SK5		棒状不明				9.5	Fe	4片に折損
9	C-SK9		銭貨(永楽通宝)	25.1	24.7	1.2	3.3	Cu	
10	C-SK11		銭貨(開元通宝)	24.9	24.9	0.9	3	Cu	摩耗
11	C-SK14		棒状不明				6.6	Fe	12片に折損
12	C-SK14		棒状不明			6.5	14.3	Fe	6片に折損
13	C-SK20		板状不明				134.2	Fe	数10片に分離破損
14	C-SK25		煙管	84.2	10.8	10.8	11.8	Cu	断面六角形
15	C-SK32		バックル状	31	24.5	2.5	3.4	Fe	銅製の商標札付属
16	C-SK46		銭貨(銭種不明)	20.7	20.6	0.9	1.8	Cu	
17	C-P62		煙管	40.5	11.6	11.6	4.3	Cu	破損、一部欠損
18	C-P114		銭貨(寛永通宝)	21.5	21.5	0.8	1.8	Cu	
19	C-P133		煙管	51.4	10.5	10.5	3.2	Cu	3片(大1小2)に破損
20	C-P133		簪	(17.0)	17.9	1.1	4.7	Cu	
21	C-P133		不明				13.7	Fe	7片に分離破損
22	C-P151		針金	61	4.8	1.8	1.9	Fe	断面丸型
23	炭焼カマ		板状不明			2.1	17.7	Fe	30数片に分離破損、24と同質
24	炭焼カマ		板状不明				143.1	Fe	数10片に分離破損、23と同質
25	SB111	東北1/4	滓				57.5	Fe	
26	SB111	東北1/4	滓				145.7	Fe	

第3表 金属製品一覧表

石器



金属製品



ID-10



ID-18

0 S=2/3 5cm
石器1-12、金属製品

0 S=1/3 10cm
石器13-18

第 11 图 石器実測図・金属製品拓影

第Ⅳ章 総括

今回の調査で発見された遺構・遺物は概ね縄文時代、平安時代、中世、近世とそれ以降の4時期にまとめられる。これらを古い順に確認しながら、調査地とその周辺の状態を推定してみたい。

縄文時代に明らかに属するのは3棟の竪穴住居址と数基の土坑・ピットである。住居址は2棟が中期後葉、1棟が中期中葉と推定され、土坑には中期初頭の土器を伴ったものがいくつかある。また他時期の遺構への混入品であったが中期中葉の土器もみられたので、中期初頭から後葉にかけて断続的に営まれた、小規模な集落であったと考えられる。調査地は小河川の浅谷に挟まれた台地状の地形に位置しているため、発掘開始前には本格的な該期集落址の検出も期待されたが、結果はかなり小ぢんまりしたものであった。しかし、縄文中期の内での時期的な多様性は注目すべきで、本調査地の周辺には各時期に対応する、さらに規模の大きい集落址の存在も想定していく必要がある。

平安時代は8棟の竪穴住居址と2棟の掘立柱建物址を確認したが、後者は柱穴の規模と配置からこの時期に属すると推定したもので、遺物等での裏付けは不確実である。竪穴住居址から出土した土器類は長野県埋蔵文化財センターによる松本市内長野自動車道の編年(文献3)で6期から7期に相当するもので占められ、これは9世紀前半から中葉にあたとされる。竪穴住居址の営まれた時期も同じと考えれば、数十年間という比較的短期間に集中していたことになる。本調査地の一帯には9世紀中葉を中心とする単時期の集落が展開していたと推定され、その背景は興味深いものがある。古代の文献である延喜式(927年撰進)に記される東山道(延喜の官道)が本遺跡の付近を通過しており、「錦織駅」も近いことは以前から推定されていた(文献1・2)。今回の調査で古代の道路や駅の遺構が検出されたわけではないが、それらとの関連を十分に考えねばならない。古い様相を持つ灰釉陶器の優品や墨書なども考慮すべきであろう。

中世はわずかな量の土器などが出土しているだけであるが、多数検出された土坑・ピットの中には、確証は得られないがこの時期に伴うものがかかなり含まれていると考えたい。時期的には図示できた土師質土器のカワラケが室町時代の、しかも前半に遡る可能性があるものなので、その前後を想定したい。

近世から近代については、本文中で「暗渠」とした礫を詰めた溝状の遺構に囲郭される内外の掘立柱建物址、土坑・ピット、井戸などを一体の遺構群と捉え、これらが該期の屋敷地を構成していた要素と推定する。出土した土器・陶磁器類は、全体的に近世の古い時期に遡るものではなく、むしろ近代に属するものが多い。推定される屋敷地の年代を示すものとする。また、西地区北端部西隅の平坦地として造成されている範囲には同時期の墓域が設けられていたが、傾斜地の削平、造成が「暗渠」とほぼ方位軸を揃えており、屋敷地との関連が強くうかがわれる。

当地は中世から近世までも古代と同様に交通の要衝で、第Ⅰ章で述べられた過疎化、人口減少に悩む現代とは全く違う活況を呈していたのであり、それを前提として今回の調査成果を読み解いていかねばならない。

本書の最後にあたり、発掘調査と整理作業の実施で諸般のお骨折りをいただいた地元関係者、開発関係者の皆様、ご指導をいただいた県教委や周辺市町村等の文化財担当者の皆様、慣れない現場で汗を流された皆様に厚くお礼を申し上げて結びといたします。

文献1 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻上

文献2 長野県史刊行会 1989『長野県史 通史編』第1巻 原始・古代

文献3 財団法人長野県埋蔵文化財センター 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』



遺跡遠景 (1)



遺跡遠景 (2)



調査地全景 (西から)



調査地全景 (北東から)



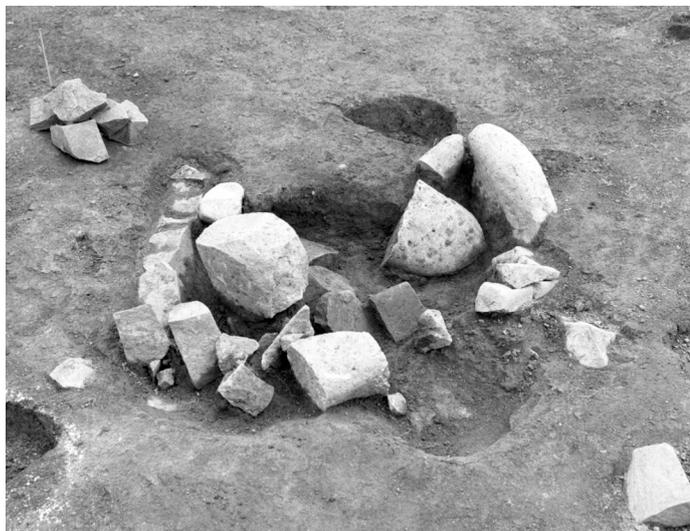
西地区 SB101(南西から)



西地区 SB101(北西から)



SB101 炉検出状況 (1)



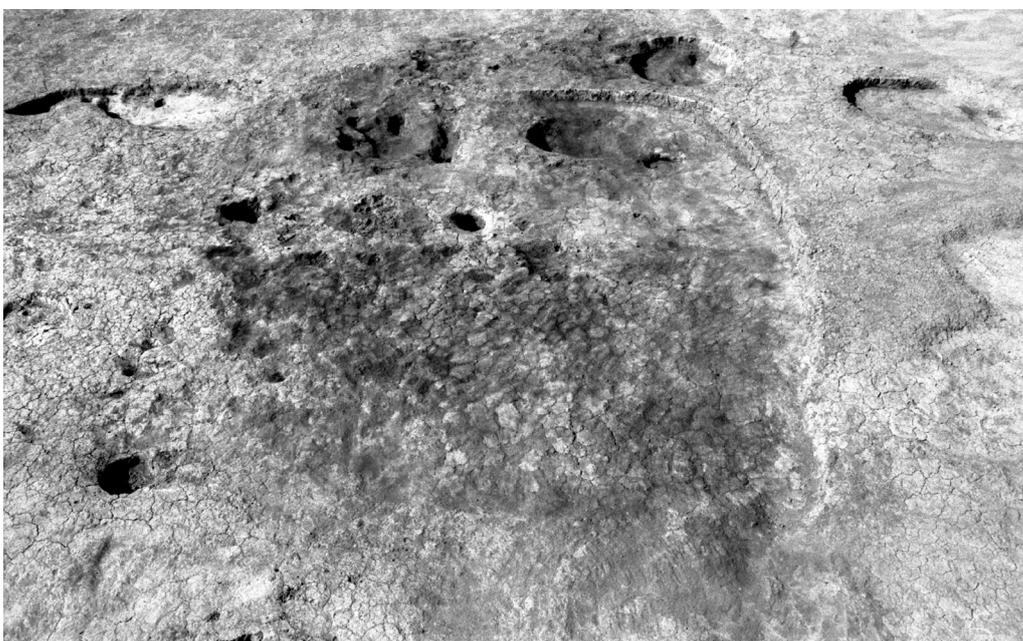
SB101 炉検出状況 (2)



SB101 炉検出状況 (3)



西地区 SB102(北から)



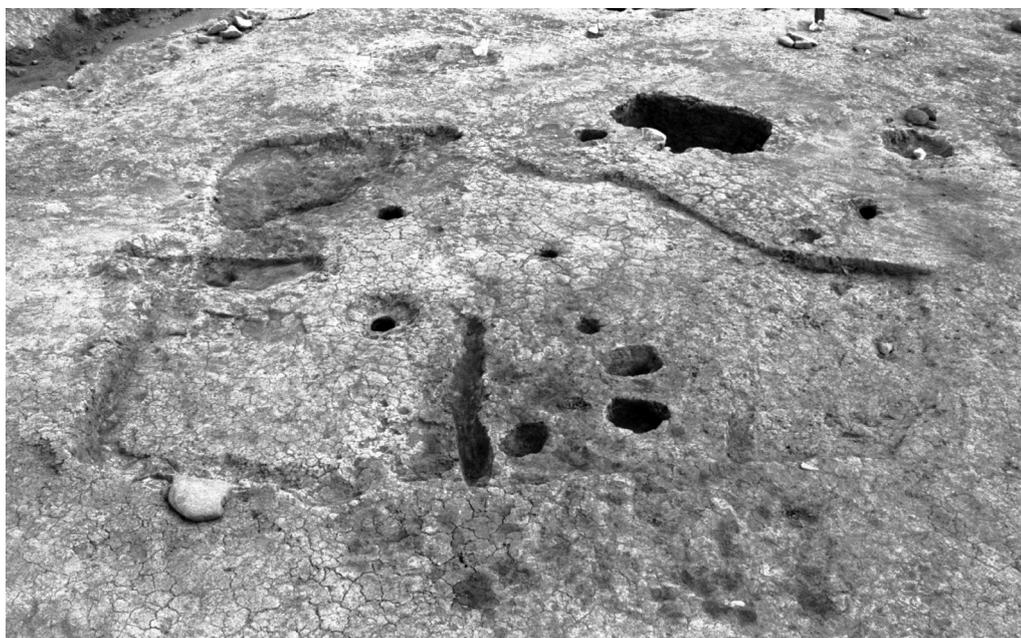
西地区 SB102(南から)



西地区 SB104(北東から)



西地区 SB104(南から)



西地区 SB105(北から)



西地区 右から SB106、SB107、SB108(北東から)



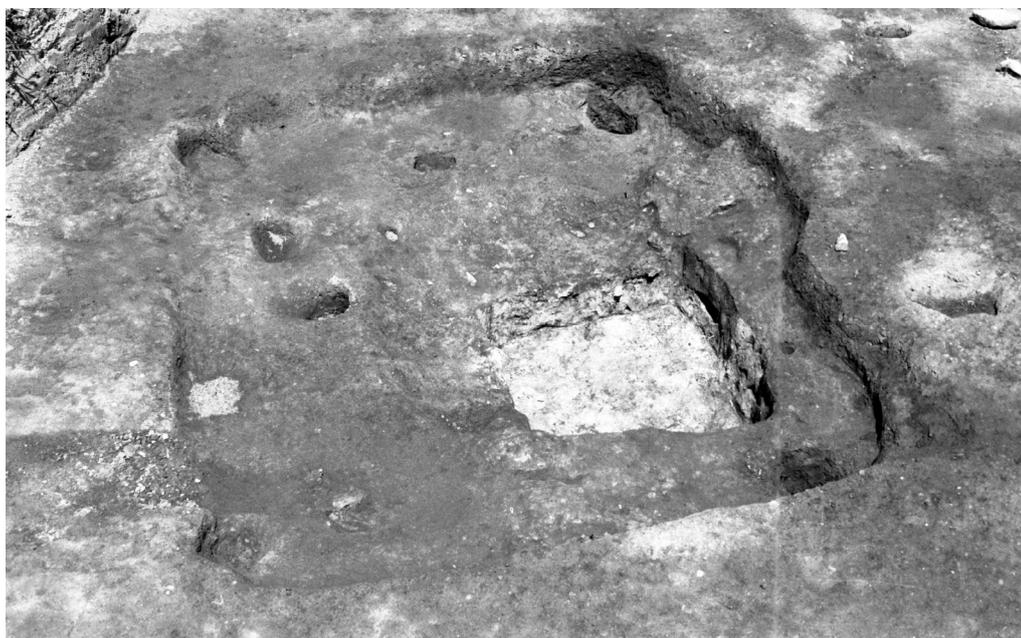
西地区 手前から SB106、SB107、SB108(北西から)



西地区 SB106
埋設土器の出土状況



西地区 SB107(南東から 1)



西地区 SB107(南東から 2)



西地区 SB108(北から)



西地区 SB108(西から)



西地区 SB108
炉・埋設土器出土状況



西地区 奥右がSB109、左がSB110(南西から)



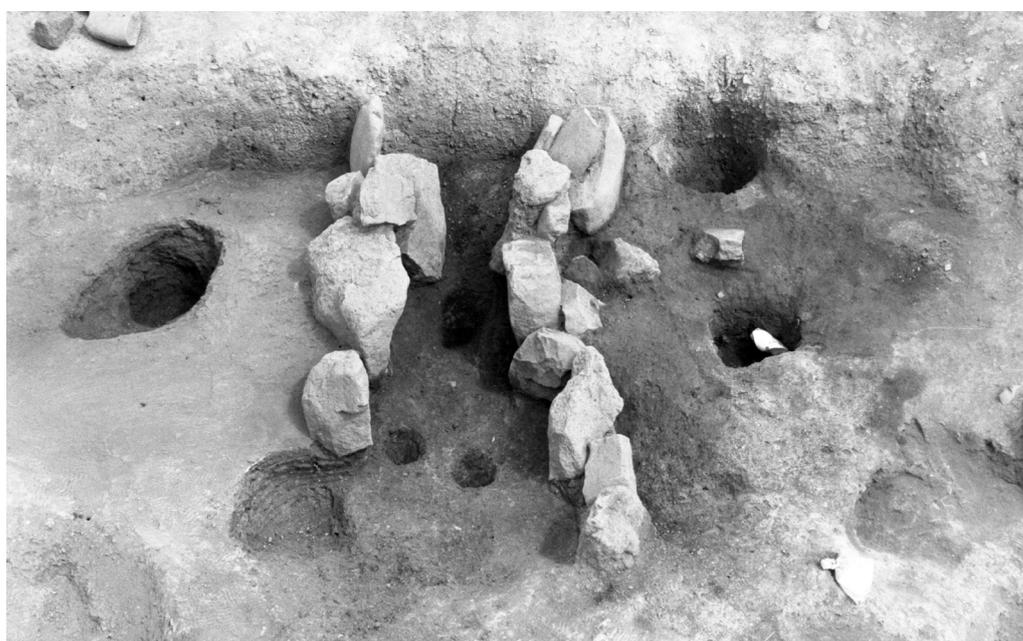
西地区 SB110(南西から)



西地区 SB109(西から)



西地区 SB109
カマド検出状況 (1)



西地区 SB109
カマド検出状況 (2)



東地区 右からSB111、SB112、SB113(西から)



東地区 SB111(東から)



東地区 SB111(南から 1)



東地区 SB111(南から 2)



東地区 SB111(南から 3)



東地区 SB112(南から)



東地区 SB112(西から)



東地区 SB112(南西から)



東地区 SB113(南から)



東地区 SB113(北東から)



西地区 ST2(南から)



西地区 ST3(南西から)



東地区 SK37(北東から)



西地区 暗渠 2(北東から)



西地区 暗渠 2(北西から)



西地区 井戸 (南西から)



重機掘削



作業風景



作業風景

繩文土器



縮尺約 1/4

古代土器・陶器



17(SB104)



19(SB104)



21(SB104)



23(SB105)



25(SB105)



27(SB105)



28(SB109)



33(SB109)



42(SB109)



45(SB110)



46(SB110)



51(SB110)



52(SB110)



53(SB110)



56(SB110)



61(SB111)



63(SB111)



64(SB111)



71(SB112)



73(SB112)



76(SB112)



77(SB112)



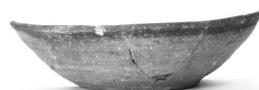
79(SB112)



86(SB112)



80(SB112)



82(SB112)



87(SB113)



90(SB113)



93(SK33)



96(SK33)



98(SK33)



100(SK33)

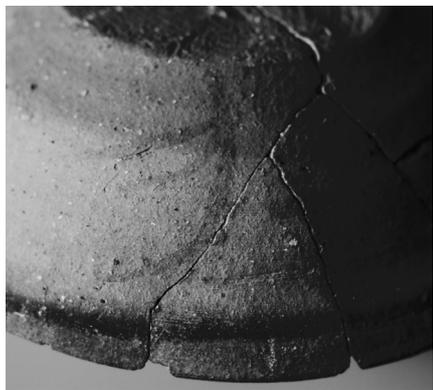


101(SK33)



102

縮尺約 1/4



23 側面墨書



76 底部墨書



77 底部墨書
縮尺約 3/4

石器



1



2



3



4



5



6



7



8



10



11



9



12



13



14



15



16



17



18

1 ~ 12 は原寸大、13 ~ 18 は約 1/2

報告書抄録

ふりがな	ながのけんひがしちくまぐんしがむら あかぬたこびやしきいせき はくつちようさほうこくしよ							
書名	長野県東筑摩郡四賀村 赤怒田コビヤシキ遺跡 発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	樋口昇一、久保田高弘、直井雅尚							
編集機関	四賀村教育委員会							
所在地	〒399-74 長野県東筑摩郡四賀村大字会田691 TEL0263-64-2308							
発行年月日	1997（平成9）年3月31日（平成8年度）							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
あかぬた 赤怒田 こびやしき コビヤシキ	ながのけんひがしちくまぐん 長野県東筑摩郡 しがむら 四賀村 おおあざあかぬた 大字赤怒田	20443	79	36度 18分 43秒	138度 00分 26秒	19950626 ～ 19951012	4,830 m ²	村営宅地造成 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
赤怒田 コビヤシキ	集落跡	縄文 平安 中世 近世 近代	竪穴住居 13棟 掘立柱建物 5棟 土坑 多数 ピット 多数 暗渠 2基	〔縄文時代〕 縄文土器、石器 〔平安時代〕 土師器・須恵器・黒色 土器・灰釉陶器 〔中世～近代〕 鉄器 カワラケ・陶磁器 瓦、石臼、銭貨		・縄文時代中期と平安時代の小規模な集落を調査した。 ・平安時代の竪穴住居跡から墨書土器が出土した。 ・近世から近代にかけての屋敷跡と思われる遺構を検出した。		
要約	・村営宅地造成事業に伴う緊急発掘として実施。西と東の2地区で、縄文、平安、中世、近世～近代の遺構と遺物を検出した。							

長野県東筑摩郡四賀村
赤怒田コビヤシキ遺跡
—発掘調査報告書—

発行日 平成9年3月31日
発行 四賀村教育委員会
〒399-74 長野県東筑摩郡四賀村大字会田691
